

やまさき文化

’19-3 *No.38



穴粟市山崎文化協会

平成最後の年

宍粟市山崎文化協会会長 福岡久藏

◇ 目 次 ◇
福原謙七 漢字
特別寄稿 ブリーフ
編集者、わが変遷
短歌

鎌田裕明

輝ける日々
森本萬千子

三木哲男

片山昭悟

三浦ゆき

研修旅行に参加して

宍粟市に日本遺産を

文化のまちづくり

宍粟茶華道協会の五〇周年に想う

私の謡曲

私の合唱団

岸根かや・橋本果歩

・庄彩那

石田陽子

下村弥

西川慶子

秋久澄子

下村悦子

山口阳子

久保明

松本撰徹

志水直昭

坂根雅彦

稻元佐代子

中野剛志

小林由佳子

中瀬公三

和司

山下直昭

大谷司郎

清水省三

清水省三

寺本三枝子

寺本三枝子

荒木俊介

フィギュアスケートGPファイナルがカナダのバンクーバーで開幕し、ショートプログラムで十六歳の紀平梨花が世界最高得点で首位発進しました。男子卓球では、グランドファイナルが韓国の仁川であり、十五歳の張本智和が史上最年少で優勝しました。そして、女子テニスでは大坂なおみが強烈なサーブを武器に全米・全豪オープンを制覇しました。大リーグのエンゼルスに移籍し、投げる・打つ・走るの全てで底知れぬ能力をみせた野球の大谷翔平が新人王を獲得しました。若い人たちの活躍が素晴らしい年でした。

また、ガンと戦う細胞を働きやすく支援する薬「オプジー」を作り、ノーベル医学賞を受賞された本庶佑京大特別教授がスウェーデン・ストックホルムでの十二月五日の授賞式に出席するため、関西空港から出国されました。今年も日本人のノーベル賞受賞者が出了のです。本当にすごいです。

でも、いいことばかりではありません。七月には梅雨前線が西日本上空に居座り、二日間にわたる豪雨で中国・四国地方は堤防決壊や土砂災害が発生し、集中豪雨の怖さを見せつけました。九月には台風による高潮が関西空港や大阪湾沿岸を襲い大変な被害になりました。地震も相次ぎ起きました。六月は大阪北部が震度六弱の地震でしたし、九月の北海道胆振東部地震は震度七で大規模な土砂災害です。これは大変です。

そして今、日本は少子高齢化が進んでいます。少子高齢化が進むということは若くて元気な働き手がいなくなり、老人ばかりが住む町になるということです。もう、自分で良ければよいなどという勝手なことは許されません。これからは平和を願い、仲間と仲良く、そして楽しく過ごせることを色々考え、甘えたりわがままを言わず、それぞれが頑張って自立して生きるようにしなければならない新しい時代が来るようです。



表紙題字
絵

編集後記

山崎邦楽の会
事務局だより

第四十回 春の芸能祭のご案内

山崎町民合唱五十年の足跡

夢に見た山崎本多まつり

山崎・加生・つた・いさわ冠句会

川柳破丸会

山崎邦楽の会

石野和雄様のご逝去を悼む

寺本三枝子

清水省三

寺本三枝子

清水省三

寺本三枝子

荒木俊介

福原謙七

輝ける日々

鎌田裕明



福原謙七翁
宍粟市教育委員会所蔵

謙七の類い希な博識と教養、更に政府や政界の要人との繋がりを謙七はどのように身につけたのか、八十四年の生涯を辿ってみたいと思います。

第一章 生誕

謙七は「播州山崎で横野儀右衛門を父として生まれた。はじめ隆蔵、次ぎに横尾練藏と称し、後に姓の福原に復し、名を謙七と改む」と「福原謙七翁碑」に記されています。記念碑は、恵比寿神社から築の丸児童公園への舗装された階段の坂道に沿って、南面して建っています。大正十三（一九二四）年から、今日まで文字鮮明、容の崩れなく、風雪に耐え創建時の面影を残しています。讃岐産青木石に刻まれた撰文は丹波を地盤とした衆議院議員田艇吉です。謙七の人となりを的確に記した漢文は謙七を偲ぶ切々とした感情に溢れ、事績を簡潔に伝えています。題字は艇吉の弟で貴族院議員、通信大臣、台湾総督を歴任した田健治郎です。

謙七は天保十二（一八四一）年八月二日、宍粟市山崎町、今の伊沢町で生まれました。同じ年、長州で伊藤博文が呱々の声を上げています。百姓の子に生まれた博文は長州という日本史上希有な役割を果たした藩で、持ち前の気力と知力で初代内閣総理大臣として位人臣を極めました。伊藤と謙七は四書五経を基幹に据えた儒学を学び、広い世界に出て行つた点は共通しています。ともに時代の課題に、それぞれのやり方で応えようとした。伊藤博文は尊皇攘夷から倒幕へ政争と戦場のなかで、生死を賭けて理想を追求し、二十二歳の時藩命によりイギリス留学をしています。他方、謙七は尊王論を基軸に据えた『皇朝靖献遺言』を著し自らの立ち位置を宣揚したのは三十二歳の時でした。知の蓄積量と漢学を中心とした学びの深さを以て播磨に生きた謙七。二人の青春は誠に輝いたものでありました。そして、活躍の舞台を異にしながら、ともに激動の幕末、政体激変の維新そして発展と充実の明治を生きています。

謙七が生まれた頃の山崎の地は本多家一万石の領地で幕府が西の要として配する「端に供す」ためと記し、続いて、「上京の折、暫時の拝謁を賜りたい」と、ついては「なにとぞ明日、相趨くので在宅されたく、僭越ながら前もつて願い上げ・・・・と並々ならぬ間柄を思わせる文が続いています。ちなみに帝国党の国会議員は明治三十一年には二〇名、その前身の国民協会では明治二十五年に七〇名でした。

の生家はあり、米を商っていました。天保九年に山崎には「十軒の米屋」があり、その数は小間物屋や質屋などを超えていました。家のつくりは鬼連子に囲まれた商家の佇まいで、中に入ると広い土間と玄関がまちに畳の間がひろがり、中心に商机囲いと大福帳が備えてありました。

福原家の菩提寺は寺町通りの北約五十坪の最上山の山麓に位置し、謙七の墓は本堂の裏山にあり、大正十三年二月六日没と刻まれています。ここは福原家の末裔の方々がおまつりをされています。このお寺の先代によりますと、檀家参りの際に福原家の御息女からお聞きになつたことですが、「本多家のお殿様がご面談に御越しになられたときは奥の間に入られこの座におすわりになつた」といつたことが伝えられています。なお、後述する「靖献義塾」の位置ですが、出水町通りに面し、実家より徒歩で八十歩余（約六十五坪）東にありました。

第二章 学びの時代 よき師、よき友との出会い

謙七の学びの時代の特色は大坂、丹波、備中で二十年近くかけて、優れた師について、徹底して「格物致知」に努めたということです。「格物致知」は大事な言葉なので斯界の第一人者の解説を紹介しておきます。金谷治氏はこれを「自分自身の知識を十分におしきわめたいと思うなら、世界の事物についてそれを内に在する理をきわめつくすこと」と説明し、島田虔次氏は「敬と格物致知は朱子学の二本の大黒柱である」とその意義を強調しています。謙七の以後の活躍の基礎はこの時代に培つたものでした。

福原謙七は始めの学びの地を大坂に定めています。この理由は次のことが考えられます。第一は、藩が大坂に蔵屋敷をおいていたことです。米を商つていました。藩は幕府から役料を別途支給され、役に就いている間は大坂に六十名を超える藩士たちを常駐させていました。

第八代藩主忠鄰侯は安政四（一八五七）年から通算五年八ヶ月の間、大坂城定番とか加番という公役を負担し大坂城代の補佐や警備のトップの役を果たしていました。藩は幕府から役料を別途支給され、役に就いている間は大坂に六十名を超える藩士たちを常駐させていました。

録もあります。この後藤松陰は頼山陽の高弟ですが、大事なのは謙七がこの後藤松陰に師事していることです。名嶋や磯部が塾の俊才謙七を知るのはごく自然な成り行きです。このような流れのなかで、謙七が、幕末に藩主の侍講として士籍を与えられ、藩校「思斎館」の教授に補されたことも十分納得できます。

「学に志し」、山崎を出た謙七は大坂で松本巣と後藤松陰、篠山で渡辺弗措、柏原の小島省斎、備中で阪谷朗廬ら高名にして学識ある師について儒学を修めました。謙七の学びの時代はペリーの黒船来航で始まる欧米諸国との厳しい開国要求という外圧の中で、国論は開国か攘夷で揺れ、尊皇論の高まりの中で幕府が崩壊するという大きな歴史の転換期でした。

はじめに学んだ松本巣は文政二（一八一九）年に出雲で生まれ、江戸で梁川星巖、安積良斎に師事し学を深めました。出雲大社神徳弘布の名の下に京坂の間を往来し、志士と交わり、王事に尽くし、勤王思想の弘布に務めています。

次に後藤松陰の塾で学びます。松陰は寛政九（一七九七）年美濃の生まれ、京都で頼山陽の最初の弟子になりました。謙七は松陰を通して頼山陽の影響を受けています。文政三年大坂で開塾しました。文に優れ、「詩の廣瀬旭莊、文の後藤松陰」と呼ばれています。謙七の文才と勤王思想はここで培われました。

そして篠山の渡辺弗措の塾に転じます。弗措は文政元年篠山で生まれ、江戸の昌平坂学問所の塾頭も務めたことのある大儒者です。弗措は、前述の『皇朝靖献遺言』に序文を寄せて弟子謙七の著書を激賞しています。弗措は安政四年に江戸から篠山に帰っているので、謙七はそれ以後に学んだと推察されます。

謙七はその後柏原の小島省斎に学んでいます。省斎は文化元（一八〇四）年水上郡青垣町佐治で生まれ、京都の猪飼敬所のもとで学びます。帰郷後藩校創設に係わり、文久二（一八六二）年から柏原藩の側用人となり藩政に参画し藩論を勤王に導きました。この前後に謙七は省斎に学んだと思われますが、省斎は常に藩の枢機に参与して多忙であります。

ここにおいて謙七は備中の阪谷朗廬の興譲館に入ります。阪谷朗廬は文政五年、備中で生まれ、大塩平八郎の門に入り、転じて江戸で古賀洞庵の門に入り塾頭になります。病床の母の看病のために井原に帰り、嘉永六（一八五三）年崇されました。興譲館は水戸の弘道館、萩の明倫館と並んで海内三学館と称されており、謙七は幕末にその興譲館に入ったのです。朗廬は間もなく、請われ

て広島藩侍講になります。明六社の同人ともなった開明的な朗廬の思想にも深く学ぶところがありました。

謙七はこのように当時一流の儒者のもとで文字通りの苦学の時代を過ごしました。この頃のことを次の書で知ることが出来ます。それは千種出身のジャーナリスト田住豊四郎が謙七等兵庫県下の俊英四六〇人に四年かけて面談・取材して明治四十四年に著した『現代兵庫縣人物史』です。この書は次のように記しています。学びの時代は「身に襦袢どじまを纏うて寝食を廃し蠻雪の難苦を積んで前後十有余年」であった。十五歳の時母を、二〇歳の時父を亡くした謙七の暮らしを思うと胸に迫ってくるものがあります。ともあれ、謙七は学友の飲酒享樂をよそに、多くの漢籍に親しみ、記憶し、それらを現実に適用して検証するという知的な訓練の毎日を積み上げていったのです。

この章を結ぶにあたって、ふるさと山崎で早世した安原昭之の墓銘碑に触れたいと思います。この碑文を謙七が書いています。昭之は謙七よりも四つ歳下、時に共に遊学し、学を論じ、帰郷後は藩校の教授となり、謙七と同じ道を歩みました。宍粟郡長、山崎町長を歴任、因幡街道大工事などにおいて政治力を発揮しました。昭之の訃報に「余、誰と道や時事を論ぜん」と悼んだ謙七の深い嘆きに、山崎藩医にして儒官の家に生まれた安原昭之との交友の深さが伝わってきます。

第三章 輝ける日々……謙七、二十七歳から四十二歳まで

謙七が十余歳でふるさとの山河を後にし、両親始め一族に別れを告げたのは、山崎の町を一望出来る最上稻荷の南庭、満開の桜が壮途を祝うよう明るく匂つてゐる頃でした。それから十星霜、藩主忠鄰侯から士籍を与えられ、新馬場の南、武間家老屋敷の西にある藩校思斎館教授そして侍講として迎えられたのです。侍講といえば君主に侍して学問を講義する人をいいます。林羅山が侍講として家康、二代将軍秀忠、三代将軍家光に仕え、新井白石が六代将軍家宣の侍講であつたなどの例があります。

さて幕末から明治維新、そして明治新政府の近代国家創成期は行政、財政、民政、文教などにわたり、それぞれが必須の重要な施策が実施されました。この間には旧来の諸大名やその家来たちの必死の反抗が佐賀の乱、秋月・萩の乱そして西南戦争として国内を不安と恐怖に巻き込みました。しかし、日本は東

洋で最も確かな実効性を持つ欧化政策を貫徹していったのです。

謙七はこのように政治、経済、文化が激しく動いている間、着実に「学びの時代」の成果をまとめ、整理し、書物として世に問います。明治六（一八七三）年は謙七が世に出る決定的な年となります。それは十九冊の書をこの年に出版していることからいえると思うのです。幸いなことに、国立国会図書館は著作権の終了した、または著作権者の許諾を得た文献をデジタル資料として検索・閲覧サービスをしています。謙七の著作はこの資料を見ると、4頁の別表のようになります。全部で三十五冊なのでその五〇%を超える著作がこの年の出版です。

（一）この時代の著作

『重校改正刪定四書』は明治六年九月、官許印刷された本で、菊縁堂藏版、朱熹著、横尾謙七点、とこの書に付された「書誌情報」にあります。刪定は『四書』即ち『論語』、『大學』、『中庸』、『孟子』について重ねて校正し、文章の不要な字句を削り、誤りを正したという意味です。また点は重校改正したという点者、とでもいうことでしようか。時に謙七、三十二歳、飾磨縣学区取締として、教育行政の責任者（今日の市町教育長に当たる）を勤めていました。前掲の『大學』序に、謙七の曰く「大権が古に復してより奎運日に開け月に盛んにして、天下府県大中小学校を設ける：習読は、平穩簡易、進歩し易きものを目的とする。：他日この書の行わるると、行われざるとに関係せん哉」。ここには、新しい学びの時代の始まりの喜びと、書の発刊に当たつての謙七のいささかの自負が感じられます。

注目されるのはこの序の末尾に、後学横尾謙敬叙と記されていること、堺で出版されていること、そして儒学の基本書中の第一にあげられる『大學』の点者として記されていることです。三十二歳の謙七の書が競争の激しい大阪商圈で、出版されているのは謙七が学識、世評とともに他に比して遜色がなかったからでしょう。また、ある種の因縁のようなものを感じたのは「漢籍データバンク」の『四書集註』にヒットした四六三冊の書の中には、当然のことですが山崎闇斎や林羅山が点者と書かれた『書』があつたことです。謙七が点者となつた書が遙か一四〇余年経過した平成の世の学術書のリストに載せられ、著者として斯界の第一人者が記されたリストに並載されていました。

『大學』について赤塚忠は、「『大學』は古典としての価値を持っており、

解決しようとするその時代の問題を背負っていた。国家の秩序を確立しようとするとき、それが道徳を基本とする限り、その一貫する体系を明らかにすることは緊要なことであった」と書いています。謙七が生きた時代は、幕藩体制の封建的秩序の時代から明治新政府の絶対主義的新秩序形成への過渡期で、破壊と創造、正反の止揚の上に諸々の価値が形成される激動の時代でした。謙七はまさにこの新秩序形成の要請に応えるという意味をもつて重校改正刪定『四書』を出版したと言えるのではないかと思えるのです。

『四書』の出版に当たり点者であつた謙七の豊かな漢学の知見と学識は全國レベルだったのです。「飾磨縣学区取締」という県教育行政の地方官の時代、「揖東郡長、印南郡長」という県行政の地方官僚の時代、謙七の職務遂行力は抜群で、それは儒学で鍛え上げた人に共通した思考訓練の厚みや豊かな知と柔軟な思考習慣に由るものであつたと思われます。

謙七は職場で、ふるさとで、そして様々な会合で多くの同学の士や師と出会い、意氣投合し、侃々諤々の論を闘わし、その度に柔軟な論の運び、深く漢籍に沈潜した者に見られる謙虚な人柄で多くの政治家や行政官の知己を得、社会的地位を固めていきました。謙七の人脈の豊かさは儒学者間のネットワークと礼や敬を中心とした徹底した自己修養で身につけた人柄の魅力に由ると思われます。1頁の肖像写真は自然体で立ち、視線はやや下方、目と口元には厳しい学びの時代を経たものに共通した意志の強さと知性の輝きを感じます。現実を確り見据える視線は、幕末から明治にかけての混沌の彼方にある平和と安定や、人間の優しさと善意をとらえ、更に闇斎先生の「儒学の始めを成し、終わりを成す敬」の広がりを把捉している、そんな感じがします。

交友の豊かさは、例えば、松下村塾に学び、禁門の変では部隊を指揮し、次いで奥羽鎮撫総督参謀を経て、ドイツ公使、内務大臣を歴任した長州出身の品川弥二郎との交流、それは竜野での講演会開催と講師としての招致、後述する弥二郎宛て書簡などで裏付けられるところです。

また、水上郡の田艇吉がいます。謙七は田と郡長時代五年間をともにしました。そして丹波の碩儒小島省斎は共通の師でもありました。彼は、衆議院議員や阪鶴鉄道社長を務め、柏原の火力発電所開設に尽力するなど地域の発展に貢献し、「福原謙七翁碑」の見事な撰文でも知られています。

明治六年は、謙七が自らの立ち位置を『皇朝靖獻遺言』で鮮明にした年とし

横尾謙七名で出版された書(別表)

書名	出版社	出版年
1 和言孝經	宝積堂	1873
2 皇朝靖獻遺言(1~4)	田中太右衛門	1873
3 皇朝靖獻遺言(5, 6)	田中太右衛門	1873
4 皇朝靖獻遺言(7, 8)	田中太右衛門	1873
5 四書重校刪定 大學	高槻平治郎	1873
6 中庸	高槻平治郎	1873
7 論語(1, 2)	高槻平治郎	1873
8 論語(3~5)	高槻平治郎	1873
9 論語(6, 7)	高槻平治郎	1873
10 論語(8~10)	高槻平治郎	1873
11 孟子(1, 2)	高槻平治郎	1873
12 孟子(3~6)	高槻平治郎	1873
13 孟子(7~10)	高槻平治郎	1873
14 孟子(11~14)	高槻平治郎	1873
15 習字勸商往来	田中宋榮堂	1873
16 世界節用無尽藏	吉岡平助	1873
17 地球四字経	三木平兵衛	1873
18 算算新書 上	山崎好謙	1873
19 算算新書 下	山崎好謙	1873
20 文章入門	真部武助	1877
21 活基新編 上	續玉園	1878
22 活基新編 下	續玉園	1878
23 皇朝靖獻遺言(新訳)	広文堂	1916

福原謙七名で出版された書

書名	出版社	出版年
1 日本經濟立志編	宋榮堂	1881
2 弘道館記述義纂註1	成文堂	1884
3 弘道館記述義纂註2	成文堂	1884
4 弘道館記述義纂註3	成文堂	1884
5 孫子評註余談	福原謙七	1888
6 教憲衍義	私立憲政義塾	1893
7 国權同盟会趣意書	福原謙七	1894
8 共公實業起稿信用組合署名	福原謙七	1895
9 真宗・日蓮宗・禪宗各宗派大氣論	福原謙七	1900
10 炙の光(第1編)	矢文灸治所	1909
11 炙の光(第2編)	矢文灸治所	1909
12 神州:千載一遇華國一統	東方策書院	1914

著作について

横尾謙七名は明治6(1873)年、謙七32歳までに集中し、全著作の50%を超える。藩校教授を終えるまでの著作が多い。明治14年以降は福原謙七となっている。

著作は四書10冊を基底に國家論、宗教論、経済論、教育論から文章論、団碁等にわたる。

この表は国立国会図書館デジタルコレクション所蔵の圖書から筆者が作成した。

て大きな意味を持ちます。『靖献遺言』は閻斎先生の高弟浅見絅斎（一六五二～一七一二）の代表作です。その影響は吉田松陰を始め明治維新を担った志士たちから二・二六事件に繋がる青年将校にまで及んでいます。謙七は浅見絅斎が主題とした中国の忠奮義烈の士に対し楠木正成、新田義貞、北畠親房など日本史上の人物、八名について記述しました。謙七は自書の後書きで、『靖献遺言』を評して「その忠奮義烈、日月と光を争い、山岳と高きを競う」と記し、続けて『皇朝靖献遺言』においてもまた「云う」といささか誇らかに述べています。更に、先ほど述べた師・渡辺弗措も謙七の『皇朝靖献遺言』に叙を寄せて「謙七が尊ぶのは才知ではなく節義であり、忠勇節烈である」と謙七のスタンスを指摘し、「国家に急あるとき、鋒刃を冒し湯火を踏む、死を観ること帰するが如き」者が「理に明らかで義に詳しいものである」と理想の人間像を明示しています。そして、「浅見氏（浅見絅斎の『靖献遺言』を指す）に比べ我が国の諸公を載せているのは編集の功である」と『皇朝靖献遺言』の八名の選定を賛嘆しています。

なお、「編集の功」についてですが、この書の表紙には「横尾謙纂集」とあります。纂集は「集める・編集する」ということですから、「著」ではないのです。つまり謙七が例言（序文に当たる）で書いている通り「楠木氏は『南木誌』に、新田氏は『日本外史』に取る」というように、記述には出典、つまり参考にした文献があるということです。これは謙七のそれぞれの著者に対する「礼」、即ち、後学者である謙七の先学者（中山利質や頼山陽）への「敬」なのです。後述する『教憲衍義』にも「福原謙七纂集」とあり謙七の著作に対する姿勢にubreはありません。

『皇朝靖献遺言』の執筆の契機・方針については、同書後書きに大要を次のよう記しています。

「王政維新以後、何かお手伝いしたかったが、私は、迂拙、陋愚でこれといふことが出来なかつた。ある日、浅見氏の『靖献遺言』を読み、書の纂集に思ひ至り、新古読書に就き刪増折衷し大要八篇を得た。浅見氏は八年をかけたが、私は数ヶ月で脱稿、軽率疎漏を笑つていただきたい」

王政維新と記す歴史觀は二十年後の『教憲衍義』にも貫徹されています。このことの評価は別にして、鳥羽伏見の戦いから上野、北越そして五稜郭の戦い

に勝利した官軍の正当性の根拠、そして版籍奉還から廢藩置県に至り、その後の徵兵令、秩禄处分、地租改正などの絶対主義国家体制を樹立するための諸施策の遂行にインセンティブを与えたのがこの歴史觀であったのではないか、そう考えると謙七の将来には二つの道がみえてきます。どちらを選ぶか第四章と第五章で見ていきたいと思います。

『皇朝靖献遺言』の印刷は大坂の広文堂書店で、賴山陽の『日本外史』や『日本政記』の出版でも知られています。また大正五（一九一六）年には峰間信吉大東文化大学教授の現代語訳を付けて、『皇朝靖献遺言』新訳として出版されています。この書へのニーズがあつたということかもしれません。

（二）教育と行政の長として

明治五（一八七二）年、学制が発布されると、統一国家にふさわしい近代的学校教育制度の整備が進められることになります。謙七は飾磨縣学区取締に任命され、小学校の設立、教育課程や施設の整備、児童の就学促進に努め、公教育の水準を高めるための壮大な試みを最前線で統括することになります。

明治九年、兵庫県は教育行政を統一する為に、兵庫県教育会議を開催。会議の出席者は、学区取締三十七名、《竜野からは竜野最後の儒学者と言われる本間貞觀（虚舟）が出席しています》、官立師範学校派出訓導十五名の全五十二名でした。議題は「小学教則」、「小学試験法」、「小学校則」。会議録が残っており、福原謙七学区取締は「女子体操の可否」、「珠算教育の可否」について意見を述べ、その概略を見ることが出来ます。

明治十二年、学区取締に次いで、福原謙七は揖東郡長に任命され、播磨十六郡のうちの一部の基礎づくりに努めました。揖東郡は現太子町を中心に姫路市、たつの市の一部に及ぶ一町一三二村からなり、郡役所は播磨国鶴村壱番地屋敷の斑鳩寺の宝勝院に置かれ、一月三十日の開庁でした。

明治十五年、福原謙七は印南郡長に任命されます。印南郡は現高砂市を中心とし、姫路市、加古川市の一部に及ぶ二町九六村からなり、郡役所は曾根村の曾根神社神官の居宅を借り上げていました。

明治十七年の謙七の印南郡長辞任について、田住豊四郎は「高雅なる性格永く俗務に鞅掌（おうじょう）することを欲せず遂に謙七は官を辞して郷里山崎へ帰る」とこの間の事情を短く述べています。

第四章 ふるさとの山河とともに

一 教育・産業の振興に努めた時代

本章で扱うのは明治十七年から明治三十六年まで、謙七の四十三歳から六十二歳までの時期です。驚いたことには、厚生労働省は中年期を四十五～六十四歳としています。一一五年前の時点では謙七は今の中年期とほぼ同じ生活の質で生きていたということです。

謙七は郷里山崎に住み、地域の教育や産業の発展に汗を流しました。前述の田住豊四郎は「名利を負わず、聞達を求めず、旧友の榮達を見るや、雲煙過眼、唯、一意國家を念ふ」時代であったと記しています。新しい時代を支える若者を一人でも多く育てることこそが自分の天命であるとする節義と気概に満ちた時代でした。

明治十七年に山崎町出水町に私塾「靖献義塾」を興し、青少年の教育に務めました。ここで学んだ、阿曾準一は三河村村長・郡参事会委員として地域の振興に貢献しています。謙七はこの塾で教える傍ら、各地を遊説し日本の内政と外交政策について熱く語りました。その主張の一端は『教憲衍義』や『國權同盟会趣意書』等、謙七がこの時代に著した書物によって知ることができます。また、これらの書物の奥付には年月日・印刷所や、靖献義塾、謙七の住所等が記され、小稿はこれらに多く負うところがありました。

次に、産業振興面での働きですが、龍野での元内務大臣品川弥二郎演説会の開催があります。これは、日清戦争時、用務で出張帰途の元大臣を謙七達が招請した殖産興業の講演会でした。これに感銘を受けた富栖村の小林善太郎は直ちに大和に至り、造林の理論と実践を研究し、同地方の状態を見て大いに学び、その成果は穴粟の林業に刻まれています。

この時代、謙七は政党の活動や著述に多くの足跡を残しています。また、山崎町内の碑文を頼まれ、その数は全てをあわせると十指に余ります。その主なものは、山崎町開始三〇〇年記念碑（明治三十一年、山崎八幡神社）、神徳馨（明治三十五年、山崎黒住教会）、奥井堰記念碑（明治三十五年、片山）です。

（一）『教憲衍義』について／政治・教育論

教憲について詳しく説くという意味の『教憲衍義』は奥付によると発行は明治二十六年十二月。著者福原謙七、発行所は山崎町の「私立靖献義塾」でした。



題字は時の文部大臣大木喬任と兵庫県知事周布公平、序文は宍粟郡長笠井彰でした。大木は題字に「順標吐獨 敬神愛國之正志」、周布は「行義以達其道」と記しこの書のスタンスを明確に示しています。驚きは、国政のトップクラスが題字を寄せていることです。大木喬任は元肥前藩士。肥前の副島種臣、大隈重信、江藤新平などとともに幕末の尊皇討幕運動を担い、参議兼司法卿、枢密院議長を歴任。明治三十二年没。周布公平は元長州藩士。長州征討関連の政争で父と兄を失う。ヨーロッパ留学。兵庫、神奈川県の知事を経、行政裁判所長官を歴任。大正十年没。この二人の略歴を注意して見るところの時代の表舞台で活躍した要人に共通した藩閥、生死を賭けた幕末経験、外遊などに気づきます。

『教憲衍義』は、敬神愛国、天理人道、皇上奉戴の三條について記述しています。和綴じ六十一丁の本で、表紙の著書名は大日本帝国播磨国御民福原謙七集著とあり、書名の上に「修身必需、治國須要」と記されています。この「三條」は明治五年四月二十八日、教育部省御用掛江藤新平の起草による教則で、国体神学を引きつぎ神仏各宗が受容しうるような一般的な規範に組み替えたものでした。謙七は二頁をさいて（左資料参照）閻斎先生を、「先輩」とし「神道の奥義をきわめた一大豪傑である」と贅辞を呈しています。そして、時代の課題を反映させながら謙七の学識を以て同書を仕上げたのです。

本文冒頭には「敬の工夫躬行には主一無適を至要とする。主一之を敬といい、無適之を一」という。・敬は一身の主宰、万事の根本なり」と記しています。これは朱子学派の有名な敬の字の根本義とされている文で、初出は『書經』大禹謨です。誤解を恐れずわかりやすくいうと、一つのことに心を集中し他に適かぬことです。この格調は、『重校改正刪定四書』の点者福原謙七にして初めて可能であつたと思われます。時の文部大臣や兵庫県知事が題字を書いたのも肯けます。

さて、この書の出版は日清戦争の八ヶ月前

で、物情騒然とした時でした。日清戦争は朝鮮で減税と排日を掲げた農民反乱が起り、極東の安定の為ということで日本が出兵し、同じく出兵していた清と、朝鮮の内政改革をめぐって対立し戦争に至ったものでした。この頃の課題は民心を糾合し愛国への意識高揚を図り、非常時に備えることでした。この書にはこのような時代認識がうかがえます。

(二) 政治活動について

① 「國權同盟会趣意書」 明治二十七年四月

主唱者福原謙七、安原博之

謙七の住所は兵庫県播磨国山崎町

概要：「國家主義徹頭徹尾斃れて已むの熱心家で構成し、この会は酒食会でなく国家的問題に従事する。各町村に支部を置き、同盟する神官僧侶は勿論、官民ともに大和魂を養成する。國体の尊嚴を忘却し外教を崇拜し、至尊に対し不敬の所為ある者がいる。國權發揚に務める」 謙七とともに主唱した安原博之は前述の安原昭之（3頁）の弟です。

② 国民協会会頭品川弥二郎宛書簡 明治二十九年三月

発信人福原謙七 住所は四谷区麹町一二丁目松ヶ根屋にて

卷紙（三三字×一五二行）

概要：日清戦争は日本が耐えに耐えたうえの戦争であった。対露政策は容事軽舉に陥ってはいけない。政府の外交政策の基調はこの線にある。これに対し国民協会は内閣不信任案を出した。その後、不信任案を撤回したと聞いていたが不信任案を出す側は野党である。即ち野党側についたということは与党である国民協会の原点に反する。これについて国民協会内部の分裂も起っています。国民協会の方針変更は変心でなく変遷として認識し、会頭のリーダーシップで難局を乗り切ることを願う。

③ 子爵品川侯閣下宛書簡 明治三十一年十一月

発信人福原謙七 牛込北町二三植田方にて

卷紙（三八字×一三二行）

概要：この度の臨時議会で増税案を否決した議員の意向は合点できない。聖詔の出たことは可決すべきであり、陛下の御信任された人に容喙するは不信不義である。日本は国閥の国でその下に藩閥なり門閥なりが、理とし勢いと

して存在する国であり、加えて事務練達の人物が興って民望を繋ぐ国である。自進両党が政略で前内閣を打たんとする今、藩閥即ち元勲政必ずしも否ならず。同時に真正の人物を登用すべきである。おわりに、伏して乞う、閣下また重ねて當路其の人へ紹介する労を煩わせられんことを（人材登用の際は謙七をお願いしたいの意味）。この時謙七は五十七歳でした。

④ 帝国入党勧誘文（兵庫県内市町村長宛）明治三十二年十一月

発信人福原謙七 宍粟郡山崎町

概要：党派の弊害黙止できぬ事態となり秩序壞乱し慘毒は四千万同胞の頭上に落ちんとし、世界主義、個人主義が我が國を滅ぼそうとしている。この風潮に際し、欽定憲法を遵守し、泰西の長所を活用し、東亞扶翼に努める。帝國の宣言書と尊皇奉仏の旨趣を別冊に記載している。

①～④から次のことが分かるように思います。第一は、山崎から西播磨そして東京に至る活動から大阪転居・隠遁に至る経緯と情況を理解するヒントです。終の棲家を変えるということは謙七の生涯のなかで最も大きな転換点だということです。ここに見られる資料から、謙七は修己治人に徹した正統保守の位置から時局を論じ、それはあまりにも原理に即し、あまりにもラジカルで、政権の中枢にあってマキアベリズムで国政を担っていた元勲にとつては必ずしも首肯できるものではなかつたかもしれません。

謙七の言葉を借りると、「元勲政必ずしも否ならず」と「門閥、藩閥が理とし、勢いとして存在する国」という政治哲学は一つの見識です。また「世界主義、個人主義が我が國を滅ぼそうとしている」という認識は何となくニーチェを思わせます。主観的でバイアスのかかった言説のように感じられます。この限りにおいてこれは謙七の思想の真摯な表白でもあるのでしょうか。

第二は謙七の世界觀の変容があつたのではないかということです。謙七は本来、状況を冷静に、客観的に觀察し、狂信的な言動のなかつた人でした。柏原藩藩儒小島省斎や明六社同人にして中央省庁の高官を歴任した阪谷朗廬に学んだ謙七、山崎藩校思斎館教授の時代は、あの薩長はじめ各地の青年達が命を燃やし攘夷、討幕運動に身を投じ、更に戊辰戦争から五稜郭に至る戦いを生き抜いていた時、『重校改正刪定四書』の稿をひたすら練つていた、そんなタイプの青年でした。この乖離の本質に注目することによって謙七の大坂寓居が理解されるようにも思われます。

第五章 厳しさを増す時勢……ついのすみか大阪

謙七が六十二歳を過ぎ、当時の平均的な人たちより遙かに長かった壯年時代後期を終えるのは大阪転居を節目としていました。慣れ親しんだ山崎、教育と行政の官僚時代を過ごした播磨、そして国の将来や教育のあり方などを要路の大臣に建議し、自ら国権同盟会を結成した山崎。謙七が心を燃やし、最も輝いた時代を過ごした地を離れ、大阪を終の棲家としたのは何故か。その理由を謙七の歴史観に基づいて書かれた『皇朝靖献遺言』と国家・宗教觀を吐露した『教憲衍義』などに依りながらまとめておきます。

第一は思想の流れのなかでです。『王政維新の今日に当たり事務の功を以て洪恩に報いざるべからず。（功は努力、工夫の意味）』（『皇朝靖献遺言』後書）ここには執筆の動機が天皇の恩に報いるためであること、王政維新というのが謙七の国家觀であり、日本を世界の中心と見、天皇を日本の展開軸とする神話的・歴史的な日本の国体觀が強調されています。尊皇攘夷派の志士たちはこの認識の上に、幕末日本の後進国という自覚と変革への強い志向を変革のエネルギーとして、討幕運動を成し遂げました。これは変革の政治実現の戦略上の大きな推進力でした。この尊攘派志士たちの意識を「純情なナショナリズム」と色川大吉はよんています。

第二は国政中枢部との距離感です。遣欧使節として海外体験をした大久保利通を中心とする欧化による国力増大、内外への備えのため権力の集中などの絶対主義国家への施策を優先するグループはこの純情なナショナリストたちを幕藩体制打破の戦いを遂行し、この戦いに勝利するまでは熱烈な同士としました。しかし彼らが士族の特権廢止に反対し佐賀の乱、熊本の神風連の乱などを経て西南戦争に至る士族反乱で反政府の立場を鮮明にしてくると、軽視し切り捨てていきました。絶対的な権力を掌握し、強力な国家を軍隊と官僚制を根幹にしてつくろうとするグループと、諸特権を剥奪され俸禄の削減に反政府意識を高め明治政府に反旗を翻すグループとの政治的な対立の時代が明治初めから明治一〇年代でした。

第三は神道との係わりです。明治二年の二官六省の制度のもと太政官に対置された神祇官、これが同四年には太政官のもとの八省の一つの教部省管轄と格下げされます。ここには神道の関係者が権力内部から遠ざけられていく過程が見られます。謙七の『教憲衍義』は前述したとおり「天皇を日本の展開軸とみ

る神話的国体觀」に依っていました。謙七の社会的立場は微妙です。

第四はよき理解者との別れです。元内務大臣、国民協会会頭の品川弥一郎がインフルエンザで明治三十三年あつけなく五十七歳で没。元枢密院議長、元文部大臣大木喬任が明治三十二年六十八歳で没。相次ぐ急逝は謙七の以後の動きに大きな影響を与えました。この二人は謙七と国政を繋ぐキーマンで、大木は謙七の会心作『教憲衍義』の題字揮毫に見られるように謙七のよき理解者でありました。品川は日本の外交政策や教育について議論できる間柄であり、身のふり方も頼める信頼関係で結ばれていました。

以上四つの観点から謙七の思想と行動に深く関わる事項を概観しました。それぞれの流れのなかで謙七がどの立ち位置にいるかの判断は読者のお考えに委ねたいと思います。日露戦争一年前に、謙七は大阪へ転居するのです。

エピローグ

明治三十六（一九〇三）年、謙七は六十二歳。山崎を離れ、大阪上福島出入橋西詰に寓居することになります。この時謙七は奇しくも孔子が「六〇にして耳順がう」と述べた年齢を二歳超えていました。この年、対露硬論は七博士意見書を機に広がり、対露戦を回避し内治優先を主張していた伊藤博文、井上馨の路線が後退していきます。これは前述の謙七書簡の線に反する状況が社会の主流になったということです。日露開戦前夜の緊張と驟然が世を蔽ってきました。この年を境に謙七は政治から離れています。

大阪での謙七は胃病を長く患っていましたが、灸治療を受けた処、効きめがあり胃病が完治していました。これに感動し、鍼灸術を学び、許可を受け施術をした所、多くの患者がその效能の恵みを受けることとなりました。この頃のこととは謙七が出した灸の著書『灸の光 第一編・第二編』により知ることが出来ます。

『灸の光』（一）は緒方拙斎（緒方洪庵の娘婿、適塾を継ぐ）の「徹今」という題字が載せられた三十八頁、矢文灸治所社主福原謙七著、明治四十二年版です。「序」では、地球は噴火により大破裂を免れる。人も一個の小地球、故に灸火の刺激誘導有りて脳血の大破裂を免れる、と灸の有益であることを説明しツボの箇所を説示しています。ほかにも、多くの病んだ人たちの謙七への感謝や、交流の記事も掲載されています。例えば日本歴史学会の重鎮、重野安繹（やすづく）

との交流があります。彼は謙七が著した日露戦争後の「戦捷記念奉公詩史」に次のような賛評を寄せていました。「福原鶴突子（こつとうし：謙七の号）が病

患ある人に灸治をするとたちどころに治る。人は驚いて神と為す。また子（鶴
窓子のこと）の詠詩や詠物を読むと連篇つぶさに師法あり」

これに対し謙七は『前掲書』の重野文学博士という箇所で、「歴史家として経学家とし該博至らざるなし。また、文と詩に絶頂に達せられ、昨年（明治四十二年）は八十三歳の高齢で、欧州に航し、この間博士は常に三里の灸をしておられた。帰朝歓迎会の席上、博士は『灸の効能の著しき、ますます信用し来たりぬ』と、語られた」と交友の深さを記しています。

りぬ』と、語られた」と交友の深さを記しています。

大正時代にしては超高齢を生きた謙七の八十四年間は天保十二年から幕末、明治を経た激動の時代でした。日本が封建制から絶対主義・市民革命を経て世界史に華々しく登場する時代、この間誠実な儒者として教育と行政の官僚を務め、官を辞してからはふるさと山崎で中央の大老クラスと政局を論じ、時に影響力を發揮した中年期を送りました。終のすみかとなつた大阪では、窮理の心を実践し人間の身体の科学的知見を深め、病を癪やす灸を通してなお、人の役に立つ生き方を貫きました。それは謙七が点者として発刊した『四書』のなかの『大學』の根幹である『修己治人』の道に通じるものであつたようと思うのです。

謙七の晩年を不遇とか挫折とか憶測を逞しくする向きもありますが、私には謙七は未来に向かって命を燃やし続け、輝いて生きた、と思われるのです。

終わりに

福原謙七について、せいぜい三・四枚で、とお引き受けし、後日、大谷司郎事務局長から「その二倍は必要です」といわれ、途惑いながら書き始めました。大谷氏には貴重な「福原謙七翁」の肖像写真を探して頂きました。稿をすすめるにつれ関係の歴史や漢籍の資料が多く、読んでいて、関心が謙七から外れてしまったり、寄り道と道草を、有り余る時間でカバーしながら楽しませてもらいました。参考にと謙七の『文章入門』に目を通していて、「看ること多く、倣うこと多く、考えること多く」の「三多の法」に今更ながら納得したり、「馬上・枕上・廁（そく＝かわや）上の三つの上で、精苦する」ことを、いくらか真似をしたりしたことでした。



福原謙十翁碑

恵比寿神社から最上山公園への道筋にある。

福原謙七の『教憲衍義』『皇朝靖獻遺言』『重校刪定大學』『文章入門』『國權同盟会趣意書』『品川弥二郎宛書簡』など、
安丸良夫『神々の明治維新』、色川大吉『日本ナショナリズム論』、三谷太一
郎『政友会の成立』、有泉貞夫『明治國家と民衆統合』、賴山陽『日本外史』、田
住豊四郎『現代兵庫縣人物史』、『山崎町史』、『山崎藩覚帳』、松沢裕作『自由
民権運動』、金谷治『大學・中庸』、島田虔次『大學・中庸』、土田健次郎『江
戸の朱子学』、赤塚忠『大學・中庸』、菅良樹『最後の大坂加番』、田尻祐一郎
『山崎闇斎の世界』、澤井啓一『山崎闇斎』、丸山真男『闇斎学と闇斎学派』な
ど

福原謙七については、本條衛山崎闇斎研究会名誉会長さんが『崎門学派の系譜』を世に問われたとき阪谷朗廬、古賀桐庵の流れを確認された事を思い出します。

なお、私と高井淳、堀口真吾、松下宣夫、下多謙一各氏の山崎闇斎研究会共同研究『福原謙七：八十四年の生涯を貫くもの』から若干引用し、更に会での意見交換を参考にしました。会員諸氏からは私にない人生の幅や、深みからする意見をいつもながら聞くのは楽しいものであり、触発されることが多々あります。

感謝の毎日です。

フリー、編集者、わが変遷

中央公論新社 取締役 雑誌・事業局長

三木哲男

(宍粟市山崎町出身)

山崎を離れて40年余。以来、新聞記者、フリーランス、編集者、テレビコメンテーターとメディアにかかわりながら働いてきた。

忙しかったのはフリー・ライターの時と、婦人公論編集長時代である。大学卒業後、業界新聞に10年勤めた私は、独立を決意した。新聞社でそれなりに実績も積んで、「君ならフリーでやれる」という雑誌編集者の言葉を真に受けたのだ。

当時、30代前半。来し方の経験より、未来の方がはるかに長い（と、思った）。死ぬ氣でやればなんでもできると根拠のない自信が胸の内にちらちらしていた。周りが止めるのも聞かず退社。考えてみれば、フリーを後押ししてくれたのはわずかに二人。残りの大半は、「よしたほうがいい。絶対に食えない」と心から忠告してくれたが、はやる耳には入らない。

退社翌日から、フリーの厳しい現実を知ることになった。出版社に企画を送つても、電話をかけても、いっこうに相手にしてもらえないのだ。いま、出版社に勤める身にしてみれば、よくわかる。なんの実績もないライターの持ち込み企画など、毎日山ほど届くが、じっくり見る余裕はない。たまにまぐれに近いベストセラーも出るが、ヒットの方程式は、実力筆者×タイムリーな企画である。無名のフリーに割く時間があつたら、著名なジャーナリスト、作家に体重をかけたい。そんな編集者の本音もつゆ知らず、出版社にとどまらず、砂の粒のような編集プロダクションにも企画を送つて、訪ねて行つた。

「この企画は当たります。筆力も申し分ない。来週、週刊文春の編集長、岩波指定された新宿歌舞伎町裏手の小料理屋は、場所のいかがわしさにもかかわらず、結構な出費となつた。会食すること数回。

「トラブルが発生して編集長から急遽、キャンセルの連絡が入った」「私が手がけた書籍がベストセラーになり、いま手が離せない」――一度も紹介してもらえないまま、

「仕切り直しの席を設けたい。今夜あたりどう?」。

この期に及んで、目が覚めた。この後半年間、無収入となる。いよいよ進退窮まり、退社のきっかけとなった「君ならやれる」の編集者に手紙を送った。すると、「すぐ、会社に来なさい」という電話。当時、定年間近だつたはるか年上の編集者は、「なんでもっと早く連絡をよこさないんだ。とりあえず、この企画で動いてみろ」と、仕事をくれたのだ。このときは本当に涙が出た。

ここから死にものぐるいで働いた。やがて「企業もの、経済もののルポでうまいライターがいる」という評価もいただくようになった。そうなると、今度は首が回らないほどの仕事が押し寄せてくる。サラリーマンならば、仕事に強弱をつけて乗り切ることもできよう。が、フリーはそうはいかない。一度でも手を抜けば、その雑誌からの注文はゼロとなる。すべての仕事に120%で臨まなければならぬのがフリーなのだ。日々の生活は苛烈を極めた。

朝4時か5時に起きてすぐに原稿を書き始める。午前9時になり、世の中が動き始めると取材に出向く。夜帰宅後、慌ただしく食事をすますと深夜までひたすら原稿に没頭する。睡眠時間はよくて4時間。徹夜もざらだつた。それでも、忙中閑を捻り出し、友人と行ったキャンプでは、キャンプファイヤに興じる友人たちを横目でひたすら原稿を書いた。

この年、休んだのは、元旦とゴールデンウイークの休日1日、合わせて2日のみ。サラリーマン時代の3倍働いて、やつと収入が倍に近づいた。もっとも額面が倍とはいえ、交通費、電話代、コピー代、打ち合わせ費用などの大半は自分持ち。会社に経費を請求できるサラリーマンのようにはいかず、差し引くとさして変わらぬ懐具合となつた。つくづく、フリー・ライターは、イノベーションの恩恵に属さぬ肉体労働だと痛感する。

大変なハードワークだったが、なんとか都内一等地の表参道に事務所を構えることができ、この先、編集プロダクションとして仕事を広げていく計画を立てていた。フリー生活ものべ10年近くが経っていた。このとき、書き手として仕事をしていた今の会社から声をかけていただいた。「ライターも面白いでしょうが、編集もそれ以上に面白いですよ。『中央公論』編集部に来ませんか?」確かに編集者という仕事に一度は就いてみたい気がする。当時、スタッフも増えて、新たな会社も立ち上げていた。ちょっと迷つたが、1~2年やって戻

ればいいかと、再び会社勤めに戻る。結果的には仕事は予想以上に面白く、会社も肌に合った。以来20年、フリー復帰を考える暇もなく現在に至っている。

いまの会社で最も長く携わったのが雑誌『婦人公論』である。副編集長として3年、編集長として7年半かかわった。売れる雑誌を作るには、世の中の底流で起きている変化を察知し、半歩先を行かねばならないと言われる。それを痛感する10年だった。

私が副編集長についた2003年当時の読者の関心事は、夫婦、子育て、嫁姑、夫。たとえば、「もう一度夫婦!」「子育てに正解はない」「夫の実家が重たいんです」「いま夫がわからない」という特集タイトルを立てれば、7割は売れた。いわゆる鉄板テーマである。ところが2005年頃から、「鉄板」を立てても読者が反応しなくなつた。苦し紛れに「しなやかな夫婦をめざそう」「嫁姑の新しい関係を!」「夫を見直してみよう」などと、アレンジを加えたりしてみたが、ほとんど空振りに終わる。

読者に何が起きているのか、皆目わからないまま数年あがいた。「駄目もとでいろいろやってみよう」と編集部員によびかけたところ、いくつか当たりが出てきた。

「私だけのひとり時間を楽しむ」「離婚しないでいる妻たちの本音」「夫亡き後、おひとり様を生きる」「子どもに老後を奪われない」などなど。予想もしなかつたテーマがヒットする。これには、戸惑つた。読者に集まつてもらつてモニターアー会を開催したり、知り合いの女性にいろいろ聞き取り調査をしたりした。

そこでわかつてきことがある。いまも昔も読者は40～60代の女性。それは大きく変わらない。ただ、昔の女性が惹かれたテーマは、夫であり、姑であり、子どもの存在である。自分自身の幸せより、「家族の幸せ」に目が向いた。彼女たちが毎日の生活で見せた顔は、妻であり、嫁であり、母親である。つまり、家族との関係で自分の立ち位置を決めていた。そのアイデンティティが収斂されたのが「主婦」という立場である。

いまはどうか。読者が立っているのは、「主婦」よりも「私」に近い。家族との関係も大事だが、私も大事なのだ。だから売れる特集は、「私が主人公」となる。言葉にしてしまえば簡単なことに見えるが、この変化をつかんで再度、部数を回復するまでには迷走した感が強い。

ではなぜこの変化が起きたのか。なるほどと、膝を打つような説明は難しいが、携帯電話の普及によって主婦が外の世界と簡単につながれるようになったこと、失われた20年のなかで、ほとんどの主婦がパート、フルタイムで働かざ

るを得なくなったことは無視できないと思う。編集部としては、主婦、妻、母親である前に、私の幸せを真剣に考えましょうという思いで誌面を作ってきた。

そして、いま、また大きな変化が起きてつあると実感する。それがどこに向かっているのか判然とはしない。より生活の目が内向きに、よりお金の算段に向かっていることは否定できないように思う。

私も昨年、還暦を迎えた。会社員としては最終コーナーに差し掛かった。会社を辞め、念願のフリーとなり、再び会社員に戻つた我が時間を振り返つて、何が正解だったのかは、本当にわからない。物書き、編集者のどちらも天職とは言い切れない。どちらでもよかったです氣もするし、他の仕事があつたのかもしれない。

つくづく思うのは、目の前の仕事に全力を尽くすこと。そこからしか何事も始まらないということだけは人生の真実だと思う。



略歴

- | | |
|-------|--------------------|
| 1977年 | 山崎高校卒業 |
| 1978年 | 東京学芸大学教育学部国語学科卒業 |
| 1983年 | 織研新聞社入社 |
| 1990年 | 同社退社 フリーランスライター |
| 2000年 | 中央公論新社入社 『中央公論』編集部 |
| 2003年 | 『婦人公論』副編集長 |
| 2006年 | 『婦人公論』編集長 |
| 2016年 | 学芸局長 |
| 2018年 | 取締役雑誌・事業局長 |

フジテレビ「ノンストップ！」、フジテレビ「報道2001」、MXテレビ「モーニングクロス」、中京テレビ「キャッチ！」、読売テレビ「たかじんのなんでも言って委員会」などのコメントーターを務める。

短歌

山崎歌人協会

やまさき文化大学短歌部詠草
ながらえて何の証しそ自らを戒めつ
つも「未完」を彷徨ふ
風の道さがしあぐねた枯れ落ち葉物
置小屋の隅にかさなる

南 裕之

うぐいすの初音は聞かず里山に春は
いまだし水雨降りつぐ
戦中戦後を学ぶことよりひもじきを
耐えて生きたりそして生き来し

谷本 幸子

夏山の廃屋ひとつ庭先に円形テーブ
ルと白椅子ひとつ
あなたにも苦悩のありや燐々と陽の
ひかり浴ぶ向日葵の花

萩原 義子

その昔筏流し引原の川は遙かな水
底にある
音水湖を見下ろす丘の墓標らよいに
しそ見ゆるや杉木立のなか

中原 賢一

こんな日は誰かと話をしていいたい
スマホ片手に止まぬ雨見る
人生のゴール手前の道すれは肩こり
腰痛少しの未練

福元千代子

小社に正一位ののぼり高々に氏子
十八戸の夏どつと来る
因幡街道とふわが田に通ふ細道をか
つて秀吉の軍勢征けり

門積 健三

菜園に集いし虫はそれに今日の
命を限りと鳴けり
わが体のまだ動くことのあり難しし
みじみ思ふなり病む友訪へば

森元 満子

離れ住む嫁より届くカーネーション
添ふひととの百合が香にたつ
社会人となるまご小一なるもゐて門
出の春よなにか始めむ

釜付 靖子

ラジオより夜明けの唄の流れくる夜
明けの前の春のけだるさ
お日さまの匂いもらいし切干しを炊
けば厨に温もりあふる

高井 麗子

ふと浮かぶ正成正行の訣れ唄武士の
まことをつらつらうたふ
夕光のしづかに及ぶ捨て畑に男の児
二歳と摘むほとけの座

栗山 節子

藤井聰太の活躍ありてひふみんは終
のかがやくところを得たり
園広場の「だあーるませんがこーる
んだ」夢中の児らを歩を止めて見る

門積 健三

巨勢山を歩きし人に三権の花の色香
をこまやかに聞く
朝採りの雪彦山の早蕨を山分けにし
て皆でいただく

衣川有賀子

この春も手植ゑの桃が咲きました小
鳥となりて見に戻りませ
膝つきて草抜きをれば聞こゆなりチュー
リップの芽の小さな欠伸

岡本 光代

北へ向かふ桜前線追ひかけて旅して
みたき余力あるうち
眠られぬ真夜秒針はコチコチと我の
余生の時削りゆく

新井 慶子

軒先の春を見てをりこぼれ種の菜の
はな咲きぬけなげに咲きぬ
ちやんと咲きちゃんと散りゆくさく
ら花わが死の支度しみじみ思ふ

安東はつ子

皇帝の名をもつダリア去る秋を止ど
めんと咲くや軒より高き
形見にと賜びし茶碗のすっぽりと手
に添いおさまる容の穩し

森下 達子

見えかくれする
亡き母の口ぐせなりし「勿体ない」
八十路の今もその声聞こゆ

佐々木タエ子

隣家のごつこ遊びの幼な声春日に漏
れ来「じいじビールよ」
誤りて咲きしか知らず連翹の黄花い
ちりん初霜に見ゆ

植木 洋子

一葉会詠草

天上より見れば地上の喪章とも黒き
バラソルひらきて歩む
はるかなる水湖のゆるむ音やする
弥生の空のふかき紺青

山崎 智絵

山崎歌話会詠草

幾日も夫の介護に明けくれて我が身の朽ちる脳までくちる
庭先に菊花一輪残り立ち夫の退院待つかの如く

森本千代子

一瞬に稀に出逢ひし翡翠の羽根のル
リ色葦原に消ゆ
藁を焼く煙のゆつくり漂ひて郷の夕暮れはやまりてゆく

池田 春美

木の葉落としの風吹きたるらし今朝
見れば庭に散り敷く楓もみぢ葉
ままとをして遊びたる友どちと連れだちてゆく百歳体操

岡本 光代

チリリ チリチリチリリチリ目覚の
鳴り止むを待つ寝飽きして六時
学生のころの孫らの置時計「生きて
ますか」と朝々に鳴る

栗山 節子

外を見ることなく過ごす施設の夫に
けさのはゆき写真に話す
くさもみぢ地にはりつきて秋を知る
踏まれながらの名もなき草ぐさ

安東はつ子

薬局にて大きな袋をいただきて何か
知らねど勇んで帰る
分相応まづは心得ある身なり二分の一
にて効く頭痛薬

森本萬千子

病む夫へ祷りをこめて夜々編みし紺
のセーテー芥として出す

夫が着てわが着し紺のセーテーは二
十余年の冬を越えたり

山崎 智絵

もうしばらく生かされたきが悲願
なり体調もどりて草ひきに出る
ごとまで吸ひこまれゆく

佐々木タエ子

雲ひとつなき空見ればわが裡の脳み
窓の外にざざなみのやうに揺れてゐ
る木の葉を見つつリズムをとりぬ

城内 悅子

赤きスニーカー跳ねつつ走る若者
は風を起こして風を残して

池田 春美

孫達が食事にと誘ってくれる齡と

なりて胸熱くるる

短歌祭入賞入選作品

◇第十四回宍粟市民短歌祭

。兵庫県知事賞
大人らにまじりて村の総出役する
父を亡くし中学生が

岡本 光代

。兵庫県議会議長賞
ジャンケンに勝ちたる気分家族皆
出掛け私の卵かけごはん

田渕 和子

。神戸新聞社賞
ぬぎすてし幼の靴は駆けつこの続
きのままに走りをるさま

芦谷 孝子

。宍粟市市長賞
啓蟄と書かれし暦を読むやうに厨
這ひるる亀虫ひとつ

藤本 太子

。宍粟市議会議長賞
この場所は獣と車の交差点ライト
の奥に對の光あり

福元千代子

。教育委員会教育長賞
渾身の老の一鋤ひと鋤の土ほろほ
ると春に目覚む

栗山 節子

。文化協会長賞

なり体調もどりて草ひきに出る
ごとまで吸ひこまれゆく

佐々木タエ子

。宍粟市歌人連盟賞
赤きスニーカー跳ねつつ走る若者
は風を起こして風を残して

池田 春美

孫達が食事にと誘ってくれる齡と

なりて胸熱くるる

新春詠

大鷲

。入選
新聞社に〈伝書鳩部〉のありしこ
ろ年初の空を飛びし鳩たち
ゆつたりと足を伸ばして新年の河
床に立つ大鷲一羽

佐々木幸綱

入浴

。入選
新聞社に〈伝書鳩部〉のありしこ
ろ年初の空を飛びし鳩たち
帽ぬぎて初湯にひたる千利休しん
から田中与四郎になる

佐々木幸綱

ひとり酔ふのみ

。入選
平成の終はりの年の始めなりひと
りし飲めばひとり酔ふのみ

高野 公彦

。入選
平成最後の、と言はれづけし一
年のいよいよ最後にわが歌集出づ

永田 和宏

冬の入口

。入選
子供抱へしボート難民のリアルな
る渚を思ふ冬の入口
シーラカンスの憤怒することあら
ざるやスマホに飼ひて折々に見る
馬場あき子

俳

句

山崎俳句協会

観月会吟行

青嶺句会 三浦 ゆき

九月二十一日(旧暦八月十五日)青

嶺句会会員有志が一同に集まりました
が、生憎雲深く河東の峰を望む揖
保川西岸の宿の席からは月を望むこ
とはできませんでした。

しかし山沿いの家々の灯りが暖か
く、キラキラ美しく輝き印象に残り
ました。これも昭和の初めの時代か
ら続く青嶺句会の思い出の一ページ
となりました。

帰り道には、雲も少し離れおぼろ
な望の月に送られ揖保川を流れる、
そのメロディが興を添えてくれ心地
よく、良い句を掘り起こしてくれる
時を過ごすことができました。

・月天心愛宕の宮も深眠り

・いそいそと月の宴の句会かな
　　とみ子

・月まだか影絵の如き峡の村

美保子

- ・名月も雲の上よりはにかみて
- 幸子
- ・観月会雨で話はもり上がり
- 若松 幸子
- ・酒となる水清らかな年の暮れ
- 木菟抱きて共に眠りぬ楠大樹
- 遠山の皆紅葉して暮れ残る

緑山

- ・父母の昔語りや月の庭

原田 駆雲

- ・雲多き空満月の渡り行く

駆雲

- ・雨名月村の灯りの美しく

チエノ

- ・雨上がり今宵は名月独り占め

良子

- ・切干のちりちり乾くよき日和

とみ代

青嶺句会詠草

・捨てし山背負う一村威銃

・樹木医の饒舌となる花の下

・見舞客帰りて咳をためらわず

・年はゆく決めたる事をなさぬまま

・爪痕を癒すかに揺れ夏の萩

・松納め今日より心機一転と

・背伸びして結ふ短冊や星祭り

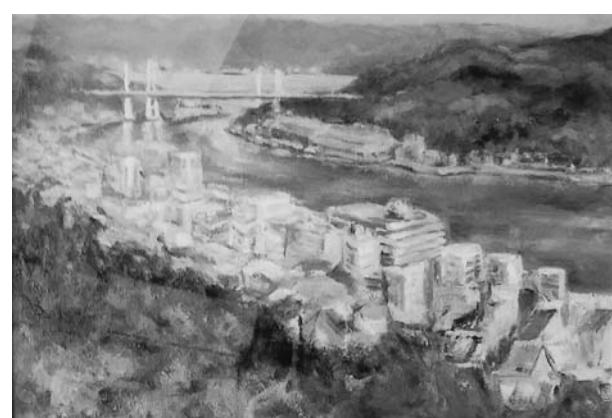
鳥羽チエノ

・二百二十日夜で溢る手水鉢

・山肌を染し色脱ぎ山眠る

・稜線が浮かび輝く今朝の霜

- ・老いてなお身のぬくもりや根深汁
- ・酒となる水清らかな年の暮れ
- ・木菟抱きて共に眠りぬ楠大樹
- ・遠山の皆紅葉して暮れ残る



山脈句会詠草

・熱爛や牧水の歌詠んじつ

・音楽のやうに園児等行く小六月

・一灯の寂寥を敷く三布蒲団

・枕屋に帰巣一閃初燕

・重田 陽子

・山肌を染し色脱ぎ山眠る

・稜線が浮かび輝く今朝の霜

・仏像の御手しなやかや煤払い

・時雨るるや海峡電車すれ違ふ

・谷口 昭子

・山墓の深深ぬくき落葉かな

・柿の葉の皿にマカロン嫁御待ち

・西田 宣子

・限りある命大切玉子酒

・人照らし街も照らして冬の月

・三浦 ゆき

・鳩降りし原爆ドームや冬青空

・秋彼岸母からもういし入選句

・高井 麗子

研修旅行に参加して

山崎郷土研究会

片山昭悟

私は九月三十日(日)に山崎文化協会と合同で大阪の堺市を訪れる機会に恵まれました。

堺市を訪れるのは初めてで楽しみにしていました。堺市には仁徳天皇陵があることから一度訪れたいと思いました。

仁徳天皇陵は、世界文化遺産の登録を目指していることから同月にはユネスコの諮問機関が視察に訪れたようです。仁徳天皇陵は、大山古墳とも大仙町名から大仙古墳とも言われています。百舌鳥古墳群にあり、全長が四八六メートル、後円部の高さ三五メートルある全国で最大の前方後円墳で、三重の濠がめぐらされています。くびれ部に造り出しがあることから築造の時期は、古墳時代の五世紀前半から中頃とされています。

宮内庁の管理地であり、十月下旬から宮内庁と堺市が合同で内堤の調査を実施し、十一月二十二日に周壕の内堤に石敷きと円筒埴輪の列が見

つかったと調査結果を報告していました。次々と興味を引かれる古墳です。

その後、近くの堺市博物館や町並みを散策しました。火縄銃が並んで

いる鉄砲館や鉄砲館屋敷跡、江戸時代から明治時代の寺子屋「清学院」

は、日本人で初めてヒマラヤ山脈を越えチベットを訪れた河口慧海も学んだところです。堺市立町屋歴史館の山口家住宅は江戸時代初期の庄屋の居宅で、国の重要文化財に指定されています。

茶人で信長や秀吉に仕えた千利休の屋敷跡や歌人で、「みだれ髪」や「君死にたまふことなけれ」の与謝野晶子の生家跡も回ることができました。これらを巡るのに堺市観光ボランティアガイドに詳しく説明していただき有難かったです。

昼食のホテル最上階からみる仁徳天皇陵は、日本最大規模の古墳で迫力のある景色でした。その昔、堺を

訪れた徳川家康は山崎とゆかりの本多忠勝の進言で伊賀越えをし、難を逃れた歴史の町でもあり、当時が偲ばれる地でもあります。



仁徳天皇陵遠望
(ホテル最上階より)

穴粟市に 日本遺産を

山崎文化協会

宗平圭司

穴粟市では現在、一宮町の御形神社本殿が国的重要文化財（建造物）として、大切に保存、管理されています。

近隣の市町においては、二年前に文化庁が日本遺産として「銀の馬車道」（朝来市神子畠・姫路市飾磨港）を認定し、県のゴールデンルートとして、周辺の市町もにぎわいを見せています。

さらに隣の佐用町では、利神城址が国的重要文化財（史跡）に認定されました。これを機に頂上への自動車道の新設や城址の公園化への整備が計画され、進行していることがあります。

穴粟市にも、日本遺産として認定いただきたい候補地があります。その一は、千種町西河内の天児屋鉄山遺跡です。播磨風土記によると和銅六年（七一三）以前より、ここで鉄が造られ、近世に入っていつそう盛んとなり、明治十八年（一八八六）まで続きました。この間千二百

年の長きにわたり、労働者数最高六百名の人々がたたら製鉄に従事しました。

現在その石積みが段状に広がり、そこに製鉄を行った高殿・砂鉄炭小屋

だけでなく、屋敷・米蔵・味噌小屋・牛小屋・麻畑・紺屋など日常生活の跡もあります。

現在の国宝級の日本刀の約七〇%が、この千種鉄で造られているとのこと。まさに日本の名刀を長期間にわたって生み出した遺構こそ、日本遺産にふさわしいと思います。

その二是篠の丸城址です。赤松一族が播州一帯から作州まで守護職として君臨し、長水城と共に北の砦として築いた由緒ある城です。頂上までの自動車道の新設や、駐車場等の整備により、観光面や市民の憩いの場として開発につながると思います。

関係各位のご支援を得て一日も早く実現し、穴粟市発展の起爆剤となることを切に願うものです。



天児屋鉄山跡（兵庫県指定史跡）

文化のまちづくり

新潮会 徳田義彦

新潮会第三十四代会長を務めるこ
とになりました。新潮会は昭和二十一
七年（一九五二）年六月に会員数二十
七名で発足しました。

私が小学二年生の時の発足です。
爾来六十八年、長い歴史を有する新
潮会です。この歴史と諸先輩方の数々
の実績を知ると身の引き締まる思い
です。会員諸氏のご協力を賜りながら
務めたいと思っています。

さて、「山崎文化協会」が長期に
わたり山崎の文化の向上と発展に貢
献されておりることは市民各位が
等しく認めているところです。特に
冊子『やまさき文化』の多岐にわた
る内容は地域の散文、短歌、俳句など
文芸から科学や舞台芸術など多岐
にわたり、楽しく拝読させていただ
いています。

「文化のないまちは飽きられる」と
昭和五十八年四月に就任された姫
路市戸谷市長が申された演説を記憶
しています。まさに行政の中に積極
的に種々文化に関わる史跡、行事、
ではないか、と思うこの頃です。

芸術文学等を位置づけ施設整備や行
事を実施されたように記憶していま
す。

基本的には魅力ある「まちづくり」

は、その地域住民が快適に生活し、
他地域の皆さんが感動して、「また
訪れたい」、終局的にはこんな「ま
ちに住みたい」と思われるような
「まちづくり」が理想であると思
います。宍粟市においても、近年こう
したスタンスで、積極的に各種団体
や個人が活動されており、古民家レ
ストラン、古民家ホテル、町家ホテ
ルなどがオープンしています。また、
地域行事として「甲冑行列」、古来
よりの「神事祭」、日本酒発祥の地
に関する広報活動など、広範な取組
が展開されています。

この過程で諸活動が地域の歴史や
風土を融合しながら構築されること
で更に魅力のある「まち」がつくり
れると期待しています。そしてこう
した事業にはソフト面での文化協会
の皆様のご協力が必要です。

「先人木を植え、後人涼を楽しむ」
の言葉があります。今、私たちは後
人として涼を楽しんでいるだけでな
く、将来の先人として私たちが将来
の後人のため木を植えることが必要
です。

宍粟茶華道協会の 五〇周年に想う

宍粟茶華道協会会長 小倉庸永

宍粟茶華道協会は茶華道の向上と
地域社会の伝統文化の発展、伝承に
寄与することを目的として設立され
ております。

茶華道は日本を代表する伝統文化
であり現在の日本人の心の中に脈々
と流れている生活文化です。その洗
練された形は日本の芸術文化を代表
するものです。

昨今、インバウンドが話題になっ
ていますが、茶華道の芸術性、洗練
された美しさ、宇宙観、世界観は東
洋文化の代表として多くの外国人の
心を魅了しています。外国人が来ら
れたらその「おもてなし」としてお
茶をふるまい、いけ花を楽しんでい
ます。

一方、日本では少し前までは、野
の花を採ってお花を生けること、客
にお茶をふるうこと、少しの茶
華道の素養があることが「読み」
「書き」「そろばん」に加えて日本人

としての基本的素養とされていま
た。しかし、今日その文化を楽しみ
あります。折しも、宍粟茶華道協会
は本年で五〇年の節目を迎えます。
これまで茶華道協会の発展にご尽力
いただきました諸先生方の思いを受
け継ぎながら、次の五〇年に向けて
進んでいかなければならないと考え
ます。多くの皆さんに参加いただき
ており、茶華道の魅力に触れていただけるよ
うな事業の実施や未来を担う子ども
たちに茶華道を通して日本人の心を
伝え育てていく事業等、宍粟に茶華
道の文化を広げ、生活の豊かさと心
の豊かさのある地域づくりに協会と
して取り組んでまいります。皆様方
のご支援をお願い致します。



笹の子茶道教室（小学生対象）
平成30年12月22日 山崎文化会館 和室

私の謡曲

山崎謡曲同好会

下村 弥

私の謡曲は、恐怖から始まる。私

の祖父栄市郎は、姫路の福王流能楽

師江崎金治郎先生に師事し、のちに

山崎で謡曲を教えていた。祖父は絵、

書も能くし、部屋には、能から画題

を得た自筆の屏風（能楽「石橋」紅

白連獅子の舞図）や掛け軸「葵上」

（鬼面の六条御息所怨霊の図）、目を

ひん剥いて睨みつける達磨図など、

また翁と姥、般若、獅子口などの能

面も飾られていた。更には、祖父が

謡う謡曲独特のおどろしい低い声も、

幼児期の私には毎日が恐怖の連続で

あつたに違いない。そして蓄積した

恐怖の塊が爆発するのである。ある

真夜中、お化けのみんなに追い駆け

られる夢で、突然起きたとして、大声

で泣き喚き、隣に寝ていた母親の胸

に震えながらしがみ付いている自分

の姿があった。鳥瞰図的に鮮明に思

い出す。この恐怖の爆発は何度もあつ

た。

私が八歳、従弟の石野哲男（元山

中医院事務長）が六歳の時、祖父は二人をその他大勢の子方で能舞台に立たせようとでも考えたのか、能立派な「鞍馬天狗」を我々に教え始めた。

「花咲かば」が始まるところだけは

今でも覚えているが、二人がじっと

正座している筈ではなく、祖父の夢は

一週間ほどで、脆くも崩れ去ったの

である。

その後私は、長く続いた家業を継ぐことなく、学校を卒業して神戸で会社勤めをして、定年前までの約三十年間は、謡曲との関わりは全く無かった。定年前に大阪の関係会社への出向に入つてから、ゆっくりと

老後の趣味について考え始めたが、

その一つに謡曲を選ぶことに全く迷

いは無かつた。誰から薦められるこ

となく、勤めの帰り道にあるカルチャー

センターの謡曲教室を選択した。

後年、知つてびっくりするのだが、

この教室を運営させていたのが、山

崎八幡神社薪能とも深く関係されて

いた観世流の上田貴弘先生を当主と

する神戸の上田家であった。上田貴

弘先生は現在、能楽協会の専務理事

を務めておられる、能楽界の大御所

である。教室は上田家高弟の笠田昭

雄先生であつた。入門初日の一度だ

け、上田貴弘先生自らが、声の出し方の指導に出てこられたが、あの体躯からの声にびっくり。地響きと空圧で吹き飛ばされそうになつたことを覚えている。大きな声でなければ謡は謡えませんとの模範である。

足掛け二年足らずの笠田先生の教

え方は変わっていた。一曲ずつ全体を通じて仕上げていき、次には新しい曲に進むという方法ではない。入

門二年の間、通して謡上げた曲は一曲もない。謡の節は、ツヨ吟（基本二音階）において約三十種類になる

そうであるが、その三十種類の節を曲の中から、新しい節を含む前後二三行抜粋したフレーズを繰り返し繰り返して、節を一つずつ覚えていく。

更に基本音程がとり易くするため、西洋音楽の楽譜に使う五線譜に落とし込んで、たとえばツヨ吟の上の音

程はドレミファのファ、下の音程は

ドレミのレからのように、また、謡

う長さを覚えるために五線譜に、二

分音符、八分音符のようにオタマ・ジャ

クンまで出てくる。非常に分かりやすかった。

ヨワ吟（基本五音階）においては、

約六十種類の節。音程は上がラ、中

がミ、下ノ中がレ、下がシと。約一

年間ずつ二年間、基礎を徹底的に叩き込まれた。今基本に返るとき、その時の五線譜は今でも読み返すことしばしばある。

この時に覚えたフレーズは、百番集（よく上演される演目百曲）のほとんどの曲をかじつたことになるのではないか。今思うと上田家そして笠田昭雄先生に巡り合えたことは私にとって幸運であった。感謝しかねない。山崎八幡神社薪能の度に出演している上田先生そして笠田先生には、山崎に来られた際には、樂屋に感謝のご挨拶に伺っている。上田家のお稽古は、私の出向先が変更になつたため、止む無くお別れすることになつてしまつた。

二回目の出向先は、姫路であったため、定年前に神戸を引き払い山崎に居を移した。待つてましたとばかりに、山中陽一先生（前山崎八幡神社薪能奉賛会会長）から「明日謡曲同好会があるから顔を出せ」との命令。陽一先生の謡のきっかけが、「大学一年の夏休みに突然私の祖父に呼び出されて、謡を聞かされその通りに謡ってみろ」から始まつたと話されていたが、その手口と同じようなものである。またその会には、

幸い私の同級生三人が顔を揃えていたこともあり、入会の決心はすぐについた。山崎で師事することになった先生は、観世流職分家の杉浦豊彦先生。観世流家元を輩出しておられる京都片山家のお筋。能楽界の若きホープである。上手いのは当然であるが、手抜きはされず、いつも熱心に教えていただいている。

お稽古は一曲毎に進んでおり、入門以来現在までに十年間で約四十曲ばかりにものぼる。ここ数年は、節や音程のご指導に留まることなく、場面の置かれている状況とか、感情とか、心情とかのご説明が入ることが多くなった。この場面は厳粛に、勇壮に軽快にとか、あるいは優雅に、溫和に、哀愁を込めてとか、気を入れて、などなど。だからどう謡ったらいのか、どう表現したらいいのかは自分で考えなさい、ということである。また曲ごとにその主題を、意識と無意識の対立とか、生と死の欲動の対立とか、正気と狂氣の対立とか、愛と憎悪の対立などなど解説いただけるが、理解できないことのほうが多い。特に男を寝取られた女が恨み恨んで、怨霊となつて現れ出でる場面など、経験のない私には臨

場感ある表現ができる筈もない。

「鵜飼」「阿漕」「善知鳥」の「三卑賤」に出てくる、漁（獵）師の殺生を生業とする者の地獄での苦しみ、救いようのない亡靈になつて、なども声だけでどう演ずればいいのか悩みはつきない。そして、新しい曲の度にいつもどの曲にも引き込まれてしまう。趣味なのだからそんなに深く考えることはない、とは思うものの、そこが謡曲の魅力なのであろう。

このように、私は多くの先生に恵まれ、そして仲間にも恵まれて、次の曲ではどんな人物に、そしてどんな感動にめぐり会えるのかを期待しながら謡曲を楽しんでいる。

や音程のご指導に留まることなく、場面の置かれている状況とか、感情とか、心情とかのご説明が入ることが多くなった。この場面は厳粛に、勇壮に軽快にとか、あるいは優雅に、

あわせて歌を歌っていただきたいです。そしてたくさんの人を笑顔にしたいです。

橋本果歩

合唱団では毎年たくさんのイベントに出演します。今年は七月に「社会を明るくする運動」、八月は台風の警報が発令中に相生で行われた「兵庫県児童合唱祭」に参加し他の合唱団と交流が出来ました。九月は神野地区の敬老会に参加しおじいちゃんおばあちゃんに喜んでいただきました。十一月はもみじまつり、ふれあい文化祭に参加して地域のみなさんにきいてもらいました。十二月はミューージカルの花束に参加してプロのミュージカルの人と一緒に歌えて感動しました。私はみんなといっしょに歌うのが楽しいです。これからも

ていこうと思います。

庄彩那

合唱団では毎年一回ミュージカルをします。今回は「森のおくりもの」というミュージカルをします。

あらすじはまま母とその娘にいじわるされてもくじけない少女マルーシカを森の神々が助けてくれる心暖まるお話です。合唱団のみんなは大きな声でセリフを言つたり動きをつけたり、ダンスをします。私の役はマルーシカにいじわるをする娘役です。

いたりしたときもありました。でも今ではそれも出来るようになります。この瞬間が私は一番好きです。そして私たちの歌声を聞いてお客様が笑顔になってくださるものとつてもうれしいです。

合唱団では毎年たくさんのイベントに出演します。今年は「森のおくりもの」というミュージカルをします。

合唱団では毎年一回ミュージカルをします。今回は「森のおくりもの」というミュージカルをします。



岸根かや

私は歌を歌うのが大好きで四年生から合唱団に入団しました。始めは音がそれなかつたりお腹から声が出せなかつたり、合唱はパートに分かれて歌うのですが違うところを歌つ



兵庫の民謡

地元の唄を次世代へ

山崎民謡連合会

石田陽子

兵庫県の民謡はたくさんあります
が、まだまだ知られていない唄もあります。
残念ながら音源が残っていない民謡もあり、唄い継いでいた人も
いなくなつてさみしく思います。
唯一、今残っている民謡を唄うこと
が私にできることです。「戸倉峠
馬越え唄」、「揖保川筏流し唄」、「そ
うめん掛け場唄」、「菅笠節」等々が
当地に残る民謡として上げられます。
今、私が力を入れている民謡は、
兵庫と鳥取の県境にある氷ノ山を唄つ
た「氷ノ山杉の実採り唄」です。去
年、鳥取県の若桜から電話が入り、
「珍しい民謡を聞かせてもらつた。
氷ノ山を唄った民謡があるとは知ら
なかつたです。これからも是非大切
に唄い続けてほしいです。」との嬉
しい言葉でした。

暮れの十二日に神戸の新長田ピフ
レホールでこの唄を披露しました。
会場のお客様からも、多くの反響を
いただきました。珍しい唄なので、

大切にして唄い継いでくださいと心
強いエールをいただきました。

設立四十周年を迎えて

さつき民踊グループ

西川慶子

「枝から枝へと 杉の実採ればよ
奥山猿めがよ 真似して笑うよ」

短い詩の中に過酷な山仕事の様子
が唄われています。これからも大切
に唄い続けて、次世代へ繋いでいき
たいと思います。

平成の時代も終わろうとしていま
す。さつき民踊グループは昭和五十
四年に設立しました。当時からの会
員は私一人になりましたが、踊り大
好きな会員の皆さんに力をいただき、
今も大事にさつき民踊グループを守っ
ています。

立ち上げからたいへんお世話にな
りましたのが一宮町の大谷政子先生
でした。十周年の発表会では、年号
も平成に変わり、平成音頭をにぎや
かに踊る素晴らしい会になりました。
後日に、大谷門下生有志で出雲大
社にお参りをして、境内で平成音頭
を踊らせていただき、宮司様にたい
へん喜んでいただくことができ、い
い思い出を作りました。

その先生も桜の花の散るごとく、
あつという間に病死されました。私
たちのショックは大きく、会員さん
も多くの方が脱退され、さみしい時
がありました。

その後、幸いにも坂東寿賀幸・岸
本幸子先生にお出会いすることが出
来、ご指導をお願いしました。先生
の素晴らしい古典の踊りは私たちに
はなかなか身につきません。私たち
がグループでできる民踊を主にした踊
りを今では練習しています。

週一回の練習は欠かさずしながら
も会員が高齢化してきたこともあり、
続けることがたいへんです。

近年は、一年を通して十七～十八
回のボランティアを楽しみに頑張っ
ています。

一口で四十年とは言いますが、言
葉では言い表せないことがいっぱい
ありました。しかし、今日まで無事
続けられましたのも岸本先生を始め
会員の協力のおかげと感謝していま
す。これからも元気で楽しくボラン
ティアができるさつき民踊グループ
でありたいと願っています。



五十周年記念展に思うこと

山崎美術協会

秋久澄子

山崎美術協会は昨年の六月十五日～十七日までの三日間、防災センターで五十周年記念展を開催しました。その折、会の創立者の方々や幹部役員を務めてくださった方々の遺作も展示して頂くことができ、懐かしさと共に深い感慨を覚えました。

美術協会展は会の創立当初、下村記念館（現在は図書館に建替えられています）で開催され、その後山崎小学校の講堂、それが解体されてからは山崎文化会館前の文化体育館、さらにこれも解体された為、防災センターで開催されるようになります。

あちこちと移動しながらも五十周年を迎えたことや、創立以来の文化への熱い思いを継承できたのは、美術協会会长の福岡久藏先生が長年に亘って会を束ねてくださり、藤原義弘先生に継いで、寺本三枝子さん、西江美恵子さんが長く事務局として

会の運営にあたってくださっているおかげだと深く感謝いたします。

私はこの会に所属させて頂いてから沢山のことを学ばせて頂きました。

洋画、日本画、書、写真、工芸のジャンルがあり、それらは別物のようですが、共通した点も多くあります。

題材の捉え方、構図のとり方、空間のとり方、また、濃淡や明度、彩度のバランスなど、随分と刺激を受けたり参考にさせてもらっています。

そのおかげで美術館に行つても鑑賞の幅が広まったような気がします。

また、美術協会会員の年齢を越えた交流も魅力的で、芸術のみならずいろんな話題に満ちていて、時にはノミニケーションを含めたコミュニケーションもあり、大いに楽しめて頂いております。

ただ残念なことに山崎美術協会は時代の流れと高齢化の影響もあって会員数の大幅な減少という問題に直面しております。

高校生以上ならどなたでも気軽に入会して頂ける会ですので、『表現することの楽しさ』を多くの方々とぜひ一緒に味わい、これまで続いてきた文化の灯が絶えることの無いよう願ってやみません。

かるたと私

山崎かるた同好会

下村悦子

るだけなので、実戦ではボロボロに負けてしまいました。「山崎はかるたが盛んで、皆とても上手なのだ」と思いました。

十年ほど前のお正月に、私は独りぼっちで家に居ました。急に「かるた取りがしたい」という気持ちが起きました。でも、昔のお友達はてんでバラバラ。どこへ行つたらかるたができるのか分かりませんでしたが、「たつの市はそういう活動が盛んですよ」と教えてくださった方が、たつてたつの市のかるた同好会に入れてもらうことができました。

しかし、その頃から「ちはやぶる」という題の漫画がヒットし始め、映画化され、かるた人口は爆発的に増えました。若い人们は進歩が速く、どんどん上手になってゆきます。

でも私は練習を重ねる内に、若い頃とは違うことを感じるようになります。何百年前に生きたこの人たちも同じ人間なのだと。



詩吟と共に

吟道撰楠流 宍粟吟詠会

山口 摂徹

明石の浦 頼山陽
乱松相映白砂明 隔水青山対晚晴
鷗背無風細波静 遠帆如座近帆行

この詩は『山陽詩抄』で「播州即目」と題している。一八一三年に姫路の馬場三郎右衛門元華に迎えられて、山陽が詠んだ遊歴中の作である。明石海峡周辺か或いは高砂の尾上の松近くの景色を詠んだものであると考えられる。(教本より)

平成三十一年三月十七日に吟道撰楠流西播北部地区連合会結成四十周年記念大会がたつの市志んぐ荘において開催されます。大会に向かって、昨年七月初めに各単位会より、準備委員を選出し、毎月の定例会と合わせて、大会に向けてのそれぞれの役割で準備等を進めています。その間にも、考查があり、撰楠流の一部・三部吟士権者決定大会の地区予選、交流吟詠発表会、秋にはお楽しみ会、

和歌の発表会と行事が多くあります。

宍粟吟詠会からも大会当日の役員、

華道、そして巻頭に記した「明石の浦」の合吟をいたします。

周年大会は、過去を振り返りつつ、

将来に向けて飛躍するための重要な催しです。会員さんと一致協力のもとに、詩吟継承発展と地域文化の向上に努めてまいりたいと思います。

私たちは、お腹の底から大きな声で詩を吟じています。会員同士が親睦のために色々と催しも行っています。歴史や文学への知識や興味が広がります。

今こそ詩吟で新しい生きがいづくりを始めてみませんか。

日本プロ囲碁界では七大タイトル（棋聖・本因坊・王座・天元・名人・碁聖・十段）があり、ほとんど

の棋士がそれらのタイトル獲得を目指してしのぎを削っているのです。

一つのタイトルを獲得するのも、並大抵でない熾烈な状況のなか、井山裕太五冠（棋聖・本因坊・王座・天元・十段）保持者は二〇〇二年、

九年に最年少の二十歳四ヶ月で名人位を獲得、二〇一七年十月に二度目の全七冠独占という前人未到の偉業

で、今までのコンピュータ囲碁ソフトでは、高段プロ棋士に勝つことは容易ではなかったのが、二〇一七年になつてはじめて、人工知能（AI）の囲碁ソフト「アルファ碁」が、

現在世界最強と言われている中国人棋士柯潔九段と対戦し、三戦全勝と圧倒しました。

そのソフトは、過去の膨大な対局情報から、自ら学習し判断能力を高める深層学習と呼ばれる技術を採用し、自己対局を重ねて、圧倒的な力を付けてきたということで、人間とAIとの対決は一区切りついで、今では既に囲碁界でもAIを棋力向上に利用されている時代になっています。

士のタイトル挑戦者が非常に多いのが際立っているのを感じるのも、前述のAI利用の若手棋士がどんどん増えている表れかと思われます。

今、二〇一九年年初からテレビや新聞紙上を賑わしている九歳の中邑董さんがこの四月一日十歳〇ヶ月でプロデビューし、これまた、現在女流本因坊藤沢里菜（現二十歳）の十一歳六ヶ月を、九年ぶりに更新、採用

試験で対局した張栩名人は九歳という年齢でこれだけの力というのは衝撃的で、「将来必ず世界で戦える棋士になると楽しみです」とコメントしました。世界の囲碁界で、中国と韓国に一・二位を占められている現状を、打破する若手棋士の出現に期待を込めて大きな拍手を贈りたい。

近年の囲碁界 環境の変化

松本 明

最近のIT関連・情報・AIなどのめざましい進歩発展で、経済・医療や日常生活などにも、色々な形で浸透してきていると感じることが多くなってきました。

囲碁の世界でも例外ではないよう

和太鼓で街を元気に、人を元気に

宍粟和太鼓アーツ俱楽部

久保聰子

私は宍粟和太鼓アーツ俱楽部の中の「彈紅」というグループに所属しています。宍粟市を中心に活動しており、太鼓を叩いて楽しむことで、「街を元気に、人を元気に」という目標を掲げ、様々なイベントやお祭りに参加させていただいている。私が和太鼓に出会ったきっかけは、八歳の時祖母に誘われて観に行つた宍粟和太鼓フェスティバルでした。その時の和太鼓のパワフルかつ繊細で、スピード感のある演奏に魅了されて和太鼓を習い始めました。

今年は和太鼓を習い始めてから十年目になります。十年の間に、高知県で花火とコラボレーションしたことや、甲冑を着て商店街を練り歩いたり、観に来てくださったお客様の笑顔や温かい拍手など、沢山の宝物のような思い出ができました。私は現在高校三年です。私の通っている山崎高校の文化祭は、毎年有

志でダンスや歌などが披露され、とても盛り上がります。私は毎年有志の発表を観る側だったのですが、高校三年生の最後の文化祭の時に、学年先生から「太鼓をオープニングで叩かんか?」と声がかかりました。私は、和太鼓の良さを学校の皆さん知ってほしいと思っていたので、もちろん引き受けました。文化祭当日はとても緊張していましたが、友達や先生方からの応援の言葉に助けられ、演奏は大成功に終わりました。友達からは「別人みたいだった」、「元気が出た」と言つてもらえました。私達の和太鼓の演奏に耳を傾け、元気や感動を感じてもらうことが、私の和太鼓を叩く上で、やりがいや心の支えになつてているんだと強く思いました。

これからも、和太鼓を通じて元気や感動を与えるような和太鼓チームを目指し、練習に励んでいます。今まで私は育てられたように思いました。人がというより地域、なんでもない隣のおばさんおじさんたちが子どもたちを育てているのかもしれません。私が和太鼓を始めた中で街の内外で活躍されている芸術家の皆さんを広く紹介することを目的に活動を始め、三年目からは小・中学生や高校生の美術活動支援にも活動を拡げて参りました。子供たちの中に美術の道で活躍しつつある者もあつたり、毎年五月の連休の時期に行ってきたターンアート展の入場者数も毎回五〇〇名を超えるほどになり、一定の成果があつたようと思つております。

自分も大人になつたら、自然とその一員になり、後に続く者たちに文化を伝えていけるものだと思っていました。

ただ時間とともに地域が少しずつ変わつてきているようですし、私自身の認識にも誤りがあつたようです。でも今のように少し寂しくなつてしまつた。



ターンアートクラブ及びターンアート展解散・終了によせて

ターンアートクラブ代表

志水和司

十七日会員による話し合いを持ち上記のような結論に達しました。

私は、時々、地方における芸術活動とは何かを問うことがあります。地方に居住し、全国的に活躍し、地域の知名度を高めることだろうか? 地域の芸術活動を地道に多く広める

二〇〇九年の第一回ターンアート展から十年、今年度五月に実施しました第十回記念ターンアート展をもちましてターンアートクラブを解散することになりました。

私は、子供の頃、山崎の街中に憧れました。傘や帽子に特化した専門店、色々な種類の食堂、様々な用具のそろう文具店、オーダーのみの洋服店……石膏像が見える画材屋……んな中で私は育てられたように思います。人がというより地域、なんでもない隣のおばさんおじさんたちが子どもたちを育てているのかもしれないと思いました。そうした中で街全体・地域全体が自然と芸術的になりました。

ターンアートクラブは、宍粟出身の内外で活躍している芸術家の皆さんを広く紹介することを目的に活動を始め、三年目からは小・中学生や高校生の美術活動支援にも活動を拡げて参りました。子供たちの中に美術の道で活躍しつつある者もあつたり、毎年五月の連休の時期に行ってきたターンアート展の入場者数も毎回五〇〇名を超えるほどになり、一定の成果があつたようと思つております。

反面、費用の捻出の懸念、会員数の激減による会員の負担過多に陥り支障を来して参りました。そこで今後の取り組みについて、去る十一月

た時代だからこそ地域の文化、個人の活動の有用性を大切に見つめる必要があるよう思えるのです。現在・

過去の穴粟の素晴らしい人材を見つめ、市民に知らせるべき時のように思えます。また後に続く者たちへしっかり文化を伝えられるように潜む人

材の資料をしつかり集め保管する係が必要だと思うのです。

これまでターンアート活動にご支援していただきましたことを厚く御礼申し上げるとともに文化協会と加盟団体の益々の発展を祈念しております。



わが人生に感謝

昭和会
山下直昭

「感謝と幸福」、いずれも美しい言葉である。私自身、すでに七十代も半ばとなつた。これまでを振り返って多くの人々に感謝すると共に、私の人生を幸福なものにしていただきた事柄を拾つて記述してみたいと思う。

今の時代、人は百年近く生きるの

も珍しくなつた。しかし、先の戦争中は、多くの若者は十代又は二十代で命を終えなければならなかつた。このことを考えても、今の平和には感謝のほかない。悲運、不運を知る者は、今の幸福を一層ありがたく思う。

まず、この世に生を受けたことを感謝したい。人は自分の生まれる時期、環境を選ぶことはできない。時代や家族、生活環境は与えられたものである。私が生まれたのは、太平洋戦争中であったが、すでに日本軍はミッドウェー海戦で惨敗しており、

その後、敗退に次ぐ敗退を重ね、終には、国土は焦土と化し、日本は有史以来はじめて異国の占領を経験した。その後の日本の復興は目覚ましかつたが、昭和三十年代中頃までは衣食住すべての面で苦勞があり、とても今の姿を予想できない生活であつた。

今、平成の終わりを迎えるにあたつて、これまでの日本の歩みを振り返る試みがなされている。明治維新以後太平洋戦争敗戦までの日本と敗戦後の日本は、同じ日本でしながら殆ど別の時代となつたと認識される。幸い私はこの戦後を生きることがで

きた。少年期の生活の不自由を知っているお陰で、今の生活すべてが感謝以外ないことを痛感する。

私の長兄は、私が生まれたとき大学予科に在学していて、父はこの兄に私の名付けを頼んだ。今もその手紙が手元にある。この兄はその後、大学在学中に「学徒出陣」し、海軍に入隊した。兄は海軍第一四期飛行専修予備学生であったが、俳優の鶴田浩二、西村晃、裏千家千玄室、出雲大社千家達彦の各氏と同期であった。二〇〇六年に兄の海軍在籍中の生活や心情を偲び「わが命空に果つ

ることも」と題して遺稿集を出版することができた。その際、同期の方々から兄に関する多くの情報が寄せられたことも感謝であった。兄は同期生と共に猛訓練を経たが、戦局は既に絶望的であった。兄は昭和二十年四月沖縄戦に特攻出撃した。出撃直前の最後の言葉は、「兄弟よさらば、

俺は征く、後を守つて幸福になれ」であった。兄は文学青年であったが、今も私の書棚には兄が耽読した文学書・哲学書が並んでいる。私は、この兄から向学心と読書傾向の影響を受けたことを今も感謝している。

私は高校卒業後、この兄と同じく法学部に進み、卒業後一時就職したが一念発起退職し、大阪で司法書士試験に合格し、その後、司法書士、土地家屋調査士の道を歩むこととなつた。この転機は、私の人生を掛けた大きな決断であった。感謝に値する経験は数限りなくあつたが、中でも大学の客員教授、調停委員を経たことは貴重な経験であった。さらに加えて私の人生の最大の感謝と喜びは妻との結婚であった。山崎の地と周りの人々に深く感謝する次第である。

平成会三十周年

平成会
坂根 雅彦

は、初心にかえるという意味を込め
「夢一生」とさせていただきました。

ないくらいの気概を持って進んでい
きたいと思います。

平成会は、今後、三十五年、四十
年とその歩みを続けていきます。年

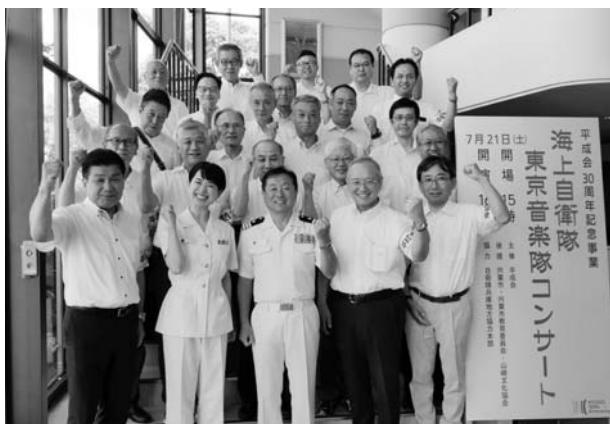
号が変わったとしても平成会の活動
は一点の曇りもないものと信じてお
ります。これまで支えていただきま
した山崎文化協会の皆様、そして、
平成会という歯車を担っていただい
ております会員の皆さん、全ての方々
に感謝申し上げるとともに、今後と
も平成会へのご理解、ご指導をよろ
しくお願ひいたします。

これからも芸能を絶やさずに、古
典が続けられるよう、日々精進して、
仲間の人たちと一緒に頑張って続け
ていきたいと思います。

「昭和」という一つの時代が終わ
り、「平成」の始まりに新たな時代
の潮流を感じ、「平成会」を設立、
地域文化への貢献と会員相互の交流
や教養を深めることを旗印に、当初
は十一名での船出となりました。こ
の間、平成会の道程を照らし続けて
いた数名の諸先輩方をご病気
で亡くしましたものの、三十周年を
迎えた今、当時の倍以上という二十
八名で自己研鑽のための研修会等を
行なうことができております。

特に地域の皆様への恩返しとして、
大晦日のカウントダウンイベント、
地域の園児を招いてのジャガイモ掘
り行事、そして、設立以来五年毎に
開催をしてきました周年記念事業な
ど、どれをとりましても我々の記憶
に鮮明に残り、その取組み、活動が
設立目的の一つである「地域文化へ
の貢献」という観点で少しでもお役
に立てたのであれば光栄です。

三十周年を迎えた本年度のテーマ



仲間と共に 踊り続けよう

稻元 佐代子
山崎日本舞踊の会

月日の経つのは早いものです。踊
りを習い始めてから六年、本当に何
も分からず、始めたばかりの稽古で
は、一つひとつ色々の手を、とても
分かりやすく先生にご指導いただきました。そうして今やっと分かって
くるようになりました。今では稽古
日が待ち遠しくてたまりません。先
生のおっしゃることをしっかりと受け



山崎町民合唱 五十年の足跡

中野剛志

山崎町民合唱

向かいあらためて深く感謝を申し上げたいと思います。

。昭和四十五年一月 成人式アトラクションに出演（下村記念館）

。以降、戦没者追悼式、秋のふれあい文化祭、善意の日大会他、山崎町

または社会福祉協議会主催行事のオーブニング等に一五回以上出演

。昭和四十六年 第一回町民歌声の集い開催（下村記念館）青年会コ

ラス部と共に

。昭和五十四年 赤とんぼ音楽祭出

演

。以降、西播磨地域内の広域音楽祭に一～二年に一回、通算二四回出演

。平成五年七月ダークダックスコンサートで共演 宍粟の森合唱団が誕生

。平成六年～平成三十年 第一回～第二五回しそうの森合唱祭に毎年出

演

。平成六年～平成三十年 第一回～

生

。平成六年～平成三十年 第一回～

第二五回しそうの森合唱祭に毎年出

演

。平成六年四月 オットーフロイデンタールコンサートに出演

。平成六年エーデン、平成七年アメリカスクイム市において音楽交流（実行委員長は藤井慧乘先生でした）

。施設訪問（不定期、詳細不明）老人介護施設、障害者施設等

。平成三十年六月 結成五十周年記念コンサート（やまさき文化会館リハーサル室）

以上、ステージ出演九〇回以上、歌った曲は単純計算一八〇曲以上に

現役メンバーによるオープニング

なることは驚きです。ただ、確たる記録が残っていないため、メンバー個々が保存している資料やアルバムを持ち寄って作成したものです。誤りや漏れがあればお許しください。（詳細は記念誌に掲載します）

長い年月ですので、当然存続さえ危ぶまれた時期がありました。しかしそれを乗り越えて今があること。

また、現在も結成当初のメンバーが二名在籍していることも特筆すべきことかもしれません。

昭和五十四年頃からでしょうか？

西播磨全体に合唱ムードが高まつたようです。

宍粟市でも「文化会館柿落とし第九合唱」に参加以降、合唱活動が盛んになり、平成六年から年に一度の宍粟の森合唱祭が定着したことを変えられしく思います。

二、五十年記念行事

私たちちは五十年の節目としてふさわしい事業を行いたいという思い

に駆られ、去る六月一日、記念コンサートを行いました。五十年の間に

関わった人たちをアルバムから拾い上げ、手分けして参加を呼び掛けたところ、当日の参加人数は予想をはるかに超え、文化会館リハーサル室

は懐かしい人でいっぱいになりました。遠くは神奈川県からの参加もありました。

合唱団のみの親である四人の方々が故人となられた今、はるか彼岸に

コーラスに始まり、会食しながら懐かしい写真で構成したスライドショー

を楽しみながらプログラムが進みます。一体になっての合唱が会場全体に響き渡ります。贊助出演あじさい

コラスの手話歌にみんなが手をあげて合わせます。元Y.O.Bを中心の男声合唱は、にわか仕立てでも男声

合唱独特の響きに拍手喝采でした。

心に響いた美しい歌声は八木グループヤングママトリオ。将来を頼むよ

うの声が飛び交いました。飛び入りのハワイアン演奏、ギター演奏と続

き、ハーモニカ演奏で急遽、二日前に亡くなられた藤井慧乘先生を偲び

「千の風になつて」を歌いました。

そして最後に全体合唱「大地讃頌」。

大合唱に会場全体が熱くなり、感動

の渦の中でお開きとなり、最後は前庭で記念撮影。

参加者それぞれが五十年の歴史

中にある自分の存在を認識し、お互

いの温かい絆を感じました。一緒に

歌うことの楽しさ、コーラスを通じて人とつながることの温もりをこれ

程感じたことはなかつたと思います。

「また一緒に歌いたい」と別れを惜しむ光景があちこちで見られました。

ここに私たち山崎町民合唱不

展を誓い、更にふるさとの合唱文化発展を祈念します。今後ともどうかよろしくお願ひいたします。

川柳破丸会

清水省三

月一回の句会も二四〇回ほどになり、集まつて楽しくやっております。

展示もにしん本店、総合病院、中国道バス停待合室にしています。

新しい会員をお待ちしております。

友が皆 病歴競う 同窓会
シニア語はそれあのあそこあればか
り

ここだけの 話と言いつつ四五人に
生田大思案

一つ知り 二つ忘れて 三つ抜け
無い知恵を 絞って脳がスカスカに

医療費を 膨らませてる「念のため」

長川 酔伸

妻諭吉 出たがりなとことよく似てる
すぐ飽きる 色々試す ダイエット
時間出来 遊べる今は 医者通い
犬なのに 猫可愛がり

谷口 遊倫

芸能人 あの人この人 名前出ず
見切り品 食べず庫内でカビ生える
知らぬ間に 妻の導火線 引火する
高橋忘剣家

記念日に 花より金の リクエスト
ボーナスは 妻と娘が 差押え
ITが 漢字の書き方 忘れさせ

菅谷 美風

坂東 笑雅

威張つても 最後はみんな 雲煙
カーナビより 煩い隣のカカアナビ
七十歳 まだ働けと 安倍が言う
谷口 遊倫

清水 三省

芸能人 あの人この人 名前出ず
見切り品 食べず庫内でカビ生える
知らぬ間に 妻の導火線 引火する
船元 哲心

まだ仕事 もう仕事の 父でした
スーパーで 携帯片手に 妻の指示
ホックする あきらめてゴムにする

非売品 聞けばますます欲しくなり
シニアフラ 腕は振れても腰振れず
再放送 覚えて無いで 楽しめる
岸本 新風 中居 絵師

ばあちゃんの 自慢話は 何年前
へそくりを 隠した場所が分らない
これからは 上げ膳据え膳 病院食
織金 和敬

分つてる 死ねば宝も ゴミになる
久し振り ヒソヒソ続く 通夜の席
追いつけぬ 孫に声だけ 走り出す
千本 風筅



第四十回春の芸能祭ご案内

日 時 二〇一九年五月十九日（日）午前十時から

場 所 山崎文化会館 大ホール

主 催 春の芸能祭実行委員会・（公財）宍粟市文化振興財団

後 援 宍粟市・宍粟市教育委員会・宍粟市文化協会・

宍粟市山崎文化協会

山崎文化協会の参加団体が中心となって、会員の皆様の日頃の練習の成果を発表いたします。一宮・波賀・千種からも贊助出演していただけます。

多くの皆様のご鑑賞とご声援をいただきますようよろしくお願ひいたします。

今年度の出演予定団体をご紹介します。

- 邦 樂 司友会・光陽会・琴泉菖蒲会・絵夢の会・藤の会・
姫路正絃社波賀教室
- 邦 舞 郁踊会・春陽会・むらさき会・千代の会・若松会
さつき民踊グループ
- 民 踊 紫洲流日本明吟会・冠翔流扇翔会
- 民 謡 山崎民謡連合会・波賀民謡会
- 日本舞踊 山崎日本舞踊の会
- 大正琴 琴城流大正琴「夢幸恵」



山崎邦楽の会 石野和雄様の ご逝去を悼む

山崎邦楽の会会长の石野和雄様がこの一月十六日にご逝去されました。石野会長様は長年にわたり、尺八一筋に打ち込まれ技を磨いて来られました。平成二十年十一月にはご自身の尺八道六十周年の演奏会を開催され、今年が七十周年となる矢先のことでの誠に残念に思います。

その傍ら、長らく山崎の邦楽の振興に寄与され、平成四年からは山崎邦楽邦舞の会会长として、また、平成二十二年からは組織が変わった山崎邦楽の会会长として地域の文化高揚に貢献された功績は大なるものがあります。石野和雄様のご冥福をお祈りいたします。

山崎邦楽の会

宍粟市山崎文化協会

役員及び団体名

会長	福岡 久藏	監事	前野 洋一
副会長	伊野 操治	事務局長	菅原 淳
理事	清水 省三	事務局次長	大谷 司郎
田中 健三	鎌田 裕明	会計	小西 美穂
下村 悅子	森本 萬千子	(敬称略・順不同)	
山崎郷土研究会	新潮会		
山崎文学会	山崎歌人協会		
山崎邦楽の会	山崎邦楽の会		
宍粟茶華道協会	宍粟茶華道協会		
山崎町謡曲同好会	山崎町謡曲同好会		
山崎郷土芸能保存会	山崎郷土芸能保存会		
昭和会	昭和会		
宍粟市少年少女合唱團	さつき民踊グループ		
山崎俳句協会	山崎美術協会		
山崎邦楽の会	山崎邦楽の会		
宍粟日本舞踊の会	宍粟日本舞踊の会		
山崎詩舞道連盟	山崎詩舞道連盟		
山崎町民合唱	山崎町民合唱		
山崎太鼓アーチ俱楽部	山崎太鼓アーチ俱楽部		
平成会	平成会		
山崎民謡連合会	山崎民謡連合会		
川柳破丸会	川柳破丸会		
ターンアートクラブ	ターンアートクラブ		
山崎かるた同好会	山崎かるた同好会		
宍粟山崎手作り甲冑の会	宍粟山崎手作り甲冑の会		

監事 前野 洋一
事務局長 菅原 淳
事務局次長 大谷 司郎
会計 小西 美穂

(敬称略・順不同)
（敬称略・順不同）

「やまさき文化」編集委員

編集長	清水 省三	委員	鎌田 裕明
伊藤 次郎	森本 萬千子	前野 良造	下村 悅子
鳥羽 チエノ	野谷 るり子	鳥羽 チエノ	小西 美穂
庄 鳥羽 チエノ	庄 鳥羽 チエノ	庄 鳥羽 チエノ	庄 鳥羽 チエノ

事務局だより

山崎城跡に高札型案内板

城下町山崎の佇まいを感じさせる場所が少なくなっているのですが、城下町であることをもっとPRしようと昨年十月、山崎城跡周辺に高札型の案内板が設置されました。この案内板は山崎を訪れた人たちに山中の存在を知つてもらおうと山崎中の位置関係から当時を想像するに足りると思っています。本丸、二の丸周辺に限られていますが、是非現地で今昔をご覧ください。ご希望の向きは山崎まち歩きガイドをご用命ください（私もその一員です）。

山崎城は江戸時代初期の一六一五年に池田家が藩主として入ってから整備を始め、一六三一年佐用郡が加

増され、六万三千石の城下町が形成されました。その後藩主の入れ替わりが続き、一六七九年からは本多家一万石となりましたが、本丸を取り囲む内堀、二の丸を囲む中堀、そして、武家屋敷と町屋を区分けする外堀の形態は変わることなく明治まで続きました。幕末に、本多家藩士遠藤源介が山崎城周辺の緻密な写生図を描き残しています。

城下町から城の正面に通じる大手前や表御門の威容、本丸の角櫓、紙屋門等八カ所に当時の写生図と城郭の絵図を貼り付け、若干の解説を付けた案内板となっています。その図が描かれたであろう位置に設置してありますので、幕末の当時を偲べる工夫もして設置されています。今はその面影を感じさせる景色は少なくなっていますが、じっくり見ると背景の山の形や建物の佇まい、通りや堀の位置関係から当時を想像するに足ります。

特別寄稿は三木折男さんから、我々の知らない出版業界のエピソードや苦労話など興味深い話題をいただきました。今後ますますのご活躍を期待します。

毎年ながら各分野の会員からの寄稿でそれぞれの活動に重みが出てきたと感じました。

唯、この地も若者の流出、少子高齢化で若い人たちの会員が少なく、文化の継承を担つて立つ会員が入会できるような工夫が必要であること

『やまさき文化』も号を重ねるにつれて内容のある文化誌になりました。

編集後記

事務局長 大谷 司郎

編集長 清水 省三



Specialty Camera Shop
ココアカメラ

■本店/〒671-2576
宍粟市山崎町鹿沢26-3
TEL(0790) 62-2089 FAX(0790) 62-7429
E-mail info@ko-e-1972.com

■咲ランド店/〒671-2545
宍粟市山崎町中井10 咲ランドSC1F
TEL・FAX(0790) 63-0533
E-mail saki@ko-e-1972.com

デンソー指定サービスステーション
自動車電装品整備・携帯電話代理店・レンタカー

カメウチ電器株式会社

本社・工場 兵庫県宍粟市山崎町今宿 98-15
TEL (0790) 62-1607(代)
太子営業所・姫路営業所・たつの営業所・福崎店

ふじむら貯衣裳

人生の節目を飾る大切な一着を貴方に

結婚式はもちろん成人式・卒業式・七五三
また留袖や訪問着・喪服のご衣裳など
豊富な品揃えでお客様をお待ちしています。



兵庫県宍粟市山崎町山崎181 Tel:0790-62-0052 <http://www.fujimura-kashiishou.com>

贈り物に…「しそう杉ボールペン&シャープペン」

三菱鉛筆「故郷（ふるさと）の木持ち」シリーズは、地球温暖化と地域材振興策に「少しでも役に立つ商品」をコンセプトに作られた筆記具です。全国の都道府県産のスギ、ヒノキ、ヒバ、マツ等に高度な木材の加工技術を施したもので、適度な重さが高級感を醸し出しています。兵庫県では「しそう杉」が選ばれています。「しそう杉」のはのかな香りをお楽しみ下さい。



¥1,800 + 税

さらにレーザー彫刻（オプション）であなただけの1本に…

参加賞、記念品に…しーたんステーショナリー各種あります！

トクサヤ文具

山崎町山崎 180-1 TEL62-0067

ほっと、ひといき 伊沢の里

○お祝いの会食 ○法要後の会食

その他各種宴会承ります

リラクゼーションルーム 好評稼働中

〒671-2517 宍粟市山崎町生谷214番地1 TEL0790 (63) 1380

地域で最も信用・信頼される
金融機関をめざして



森の妖精/ネーチャ

●豊かな街づくりをお手伝いする●

西兵庫信用金庫

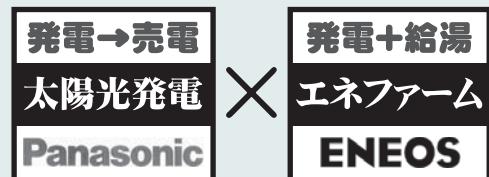
<http://www.shinkin.co.jp/nisisin/>

TEL 0790-62-2020



森の妖精/サッキー

貴邸の電力を自給自足!



スマート&工芸な
「光熱費=ゼロ」リフォーム

=お車と住まいの快適、なんなりと=

ホンジョウ

(株)本條商店・ホンジョウプロパン(株)

本社 宍粟市山崎町中井 96

石油・タイヤ・洗車・オイル
バッテリー・車両整備・保険

TEL 0790-62-4321

電気・ガス・水道工事・家電全般
住宅リフォーム・太陽光発電

TEL 0790-63-1234



NAGATA
NAGATA GROUP

西兵庫トランスポーツ株式会社

本社 兵庫県宍粟市山崎町御名335-1

TEL 0790-63-2007

FAX 0790-63-2007



創業明治28年・さつき本舗



御菓子司 さつき



御進物・おみやげ・お茶うけに、四季折々の
真心こめた手づくりの御菓子を

山田店：播州山崎町山田（電）0790-62-0160

福崎店：福崎町西田原 1177（電）0790-22-7555



ギフト・記念品に名入れ刻印で
オリジナル筆記具はいかがですか

名入れ料金 1本 350円

芯の太さ
0.5
ミリ

イトーオフィスサービス(株)

山崎町中広瀬 117-12 宍粟市役所南向い

